

発掘調査報告書第34集

平成4・5年度発掘調査

上の原Ⅲ遺跡・小鍛冶古墳群

1994.10

駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告書第34集

平成4・5年度発掘調査

上の原Ⅲ遺跡・小鍛冶古墳群

1994. 10

駒ヶ根市教育委員会

序 文

平成4・5年度にわたり実施して参りました上の原Ⅲ遺跡・小鍛冶古墳群の発掘調査が終了し、ここに報告書を刊行する運びとなりました。

この2遺跡は、天竜川の第1河岸段丘上に位置し、かつて御子柴型尖頭器の出土したことで知られるとともに、現存する古墳としては市内ではここだけとなった小鍛冶古墳群のあるところでもあります。

今回の調査は、この一帯が工業団地として開発される計画があり、その事前の発掘調査として行ったものであります。

上の原Ⅲ遺跡では、新たに旧石器の存在を確認することは出来ませんでした。かつて下村修氏が発見した地点を一部残して後世に伝えることとなりました。小鍛冶古墳群につきましては、大正年間の鳥居龍蔵博士の調査のおり、10基の古墳の存在が知られていたところですが、今回の2年度にわたる調査によって、あらたに2基の古墳の存在を確認することが出来ました。これによって現存する4基を含め9基の古墳が確認されたこととなります。

小鍛冶の古墳群は、先述したとおり市内で唯一残る古墳として貴重なものであり、開発によって破壊されることのないよう開発側との協議を進めてまいりました。その結果、完全な形で残されている3基（市有形文化財）のうち、2基については用地外とし、残る1基についても史跡公園として保存することとなりました。わずかに形をとどめる1基についても、残されることとなり大変嬉しく思う次第であります。

この度びの調査が、県教育委員会文化課のご指導をはじめ、地権者の皆様、炎天下から雪の降りしきる中まで長期にわたり調査に従事いただいた調査団の皆さん、快く作業に参加して下さった地元の皆さま等、多くの方々のご協力によって無事初期の目的を果たすことができましたことに心から感謝申し上げますとともに、この報告書が地域史研究の一助なればと念願する次第であります。

平成6年10月31日

駒ヶ根市教育長 高 坂 保

例 言

- 1 この報告書は、上の原工業団地計画に伴う事前の発掘調査であります。
- 2 本報告書は、期限内にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、資料の再検討は後日の機会に譲ることとした。
- 3 図の層位・縮尺などは、各図に示してある。
- 4 土器の実測・製図、遺構の製図及び石器の実測・製図は気賀澤進が、遺物の復元は木下平八郎があたった。
- 5 写真撮影及び編集については、木下平八郎があたった。
- 6 本報告書の編集は気賀澤があたった。執筆は気賀澤と木下が当たり各項目ごと文末に記してある。なお、第Ⅱ章第2節遺跡の地形及び地質については、寺平宏氏より寄稿いただいた。誌るして謝意としたい。
- 7 本報告書には、今回の調査によって発見された遺物の外に、上の原Ⅲ遺跡から故下村修氏が採集をした先土器時代の遺物をご遺族の温かいご理解のもと写真図版にて掲載することができました。ここに誌るして謝意に替えさせていただきたい。さらに下村春江さんが耕作中に採集された石核もご理解をいただき掲載できました。併せて感謝申し上げます。
- 8 遺物及び実測図並びに調査に伴う関係資料は、駒ヶ根市立博物館に保管してある。

目 次

例 言

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る経過	1
第 2 節 調査体制	2

第 II 章 遺跡の環境

第 1 節 地理的位置	5
第 2 節 地形及び地質	5
第 3 節 歴史的環境	9

第 III 章 発掘調査

第 1 節 調査概要	16
第 2 節 上の原Ⅲ遺跡	16
1 調査方法と概要	16
2 遺構と遺物	19
第 3 節 小巖冶古墳群	
1 小巖冶古墳群について	24
2 調査方法と調査概要	25
3 第 3 号古墳	25
4 第 4 号古墳	30
5 第 7 号古墳	37
6 第 8 号古墳	39
7 火葬墓	44

第 IV 章 まとめ	45
------------------	----

挿 図 目 次

第1図	上の原Ⅲ遺跡・小蝦治古墳群位置図	3
第2図	上の原Ⅲ遺跡・小蝦治古墳群地形図及び周辺の遺跡	4
第3図	段丘面区分図	6
第4図	第3図A-Bの地質断面図	6
第5図	×5地点の柱状図	7
第6図	×1地点(南西トレンチ)の柱状図	7
第7図	×2地点(北西トレンチ)の柱状図	7
第8図	×3地点(北東トレンチ)の柱状図	7
第9図	×4地点(南西トレンチ)の柱状図	8
第10図	×6地点の柱状図	8
第11図	上の原Ⅲ遺跡・小蝦治古墳群発掘調査概要図	13・14
第12図	上の原Ⅲ遺跡発掘調査概要図	15
第13図	上の原Ⅲ遺跡道路南区遺構・遺物出土状況図	17・18
第14図	上の原Ⅲ遺跡拡張区遺物出土状況図	17・18
第15図	上の原Ⅲ遺跡第1号土坑実測図	19
第16図	上の原Ⅲ遺跡第1号土坑付近出土遺物	20
第17図	上の原Ⅲ遺跡が址状遺構実測図	20
第18図	上の原Ⅲ遺跡道路南区出土遺物	21
第19図	上の原Ⅲ遺跡トレンチ出土遺物	22
第20図	上の原Ⅲ遺跡拡張区出土遺物	23
第21図	鳥居龍藏博士調査時の古墳位置図	24
第22図	小蝦治古墳群第3号古墳発掘調査概要図	26
第23図	小蝦治古墳群第3号古墳石状状況図	27
第24図	小蝦治古墳群第3号古墳実測図	28
第25図	小蝦治古墳群第3号古墳周濠地層断面図	29
第26図	小蝦治古墳群第3号古墳周濠内出土土器	30
第27図	小蝦治古墳群第3号古墳出土土器	30
第28図	小蝦治古墳群第4号古墳発掘調査概要図	31
第29図	小蝦治古墳群第4号古墳発掘調査図	32
第30図	小蝦治古墳群第4号古墳実測図	33・34
第31図	小蝦治古墳群第4号古墳地層断面図	35・36
第32図	小蝦治古墳群第4号古墳周濠内出土土器	37
第33図	小蝦治古墳群第7号古墳実測図	38
第34図	小蝦治古墳群第7号古墳トレンチ調査実測図	38
第35図	小蝦治古墳群第8号古墳葺石状況図	39
第36図	小蝦治古墳群第8号古墳実測図	40
第37図	小蝦治古墳群第8号古墳周濠地層断面図	41
第38図	小蝦治古墳群第8号古墳出土土器	42
第39図	小蝦治古墳群第8号古墳出土鉄器	42
第40図	小蝦治古墳群火葬墓実測図	43
第41図	小蝦治古墳群火葬墓出土古銭拓影	43

図 版 目 次

- 図版 1 上の原Ⅲ遺跡 炉址状遺構
- 図版 2 小鍛冶古墳群 第3号古墳（航空写真）
- 図版 3 小鍛冶古墳群 第3号古墳
- 図版 4 小鍛冶古墳群 第3号古墳周濠
- 図版 5 小鍛冶古墳群 第3号古墳周濠葺石残存状況
- 図版 6 小鍛冶古墳群 第3号古墳周濠葺石落下状況
- 図版 7 小鍛冶古墳群 第3号古墳周濠内高杯出土状況
- 図版 8 小鍛冶古墳群 第4号古墳周濠
- 図版 9 小鍛冶古墳群 第7号・8号古墳（航空写真）
- 図版10 小鍛冶古墳群 第8号古墳周濠
- 図版11 小鍛冶古墳群 第8号古墳高杯・鉄剣出土状況
- 図版12 小鍛冶古墳群 第3号古墳出土遺物
- 図版13 小鍛冶古墳群 第4号・7号・8号古墳出土遺物
- 図版14 小鍛冶古墳群 第8号古墳出土鉄器
- 図版15 小鍛冶古墳群 第8号古墳出土鉄器
- 図版16 小鍛冶古墳群 火葬墓
- 図版17 小鍛冶古墳群 火葬墓、古銭出土状況
- 図版18 小鍛冶古墳群 火葬墓出土古銭、第4号古墳周濠内高杯出土状況
- 図版19 上の原Ⅲ遺跡 出土石器（放下村修氏採集品）
- 図版20 上の原Ⅲ遺跡 出土石器（放下村修氏採集品）
- 図版21 上の原Ⅲ遺跡 出土石器（放下村修氏採集品）
- 図版22 上の原Ⅲ遺跡 出土石器（放下村修氏採集品）
- 図版23 上の原Ⅲ遺跡 出土石器（放下村修氏・下村春江さん採集品）

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る経過

上の原Ⅲ遺跡・小鍛冶古墳群のある下平上の原地籍一帯を工業団地として、開発しようとする計画が持ち上がりました。

上の原Ⅲ遺跡は故下村修氏が「御子柴型尖頭器」を発見した所として知られており、しかも市内では唯一の旧土器時代の遺跡であります。さらに小鍛冶古墳群はこれまた市内に残る唯一の古墳であり、現在4基が残されていますが大正年間の鳥居龍藏博士の調査の折には、ここに10基の古墳があったと記されています。

このように重要な遺跡であるため、極力保存することを前提としてそのための試掘調査を行い、遺跡の範囲の確認を行い、保存不可能な地点については発掘調査を行うこととしました。平成4年度・5年度の2箇年にわたって実施することとなり、平成5年度の試掘調査については、各方面のご理解をいただき文化庁の補助事業として実施することとなりました。平成4年度の試掘及び発掘調査、平成5年度の試掘調査によって明らかとなった遺構の発掘調査は市の単独事業で行った。

事業は平成4・5年度に現場の作業を行い、平成6年度で報告書の刊行を行うこととした。

調査は駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととなり、小鍛冶古墳群等発掘調査団を組織し、団長には友野良一氏をお願いして平成4年9月21日より現場の調査に入った。

おおまかな作業日程は以下の通りである。

平成4年9月12日 調査は小鍛冶古墳群の確認調査から行うこととし、北側1号古墳の南側一帯から行うこととした。発掘調査準備、基準杭などの設定。

10月23日 今日から、上の原Ⅲ遺跡の調査準備に入る。

12月4日 上の原Ⅲ遺跡の南側の道路及び道南部分の調査を開始する。

12月26日 発掘調査を一時中断する。

2月12日 発掘調査再開。道路及び道南部分の調査を続行する。

3月6日 小鍛冶古墳群7号古墳の周縁確認調査を始める。

3月24日 県文化課百瀬主事を交じえ来年度の調査について教育委員会・市観光課・建設課と協議する。

3月25日 本日で平成4年度調査を終了とする。

平成5年6月11日 本日より平成5年度の発掘調査を開始する。当分は補助事業分の調査を行う。

7月27日 上の原Ⅲ遺跡より土壌が確認されたため、市の単独事業として一部を全面調査することとした。

8月12日 上の原Ⅲ遺跡の調査終了

9月17日 小鍛冶古墳群の4号古墳の調査を開始する。

12月16日 4号古墳の調査終了

平成6年1月10日 7号古墳の東に新たに確認された周濠のみの8号古墳の調査に入る。

1月24日 本日で、発掘調査はすべて終了する。

第2節 調査体制

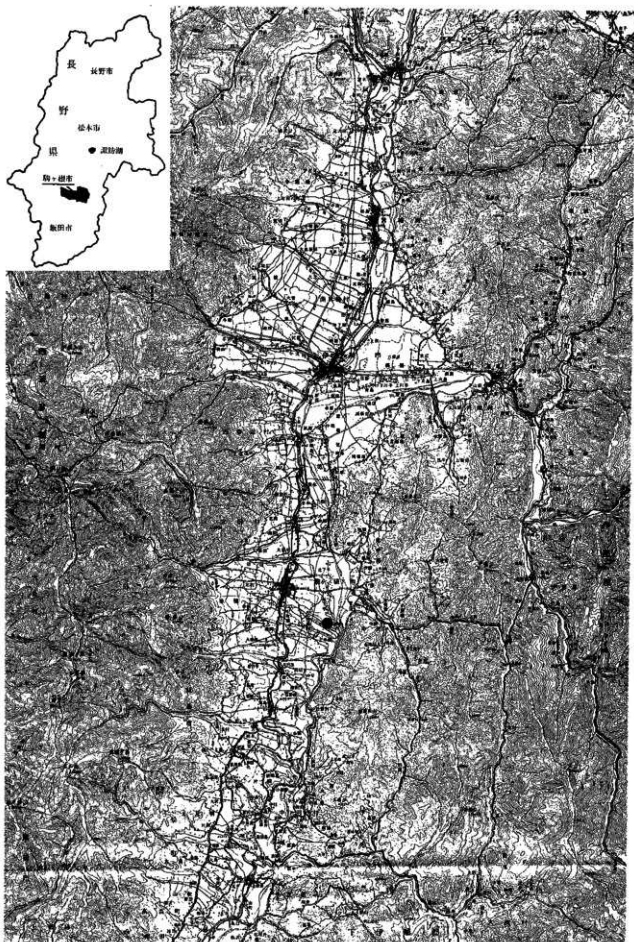
【駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会】

- 顧問 林 朝 昭 (駒ヶ根市教育委員長) (平成6年6月7日まで)
" 吉 江 修 深 (駒ヶ根市教育委員長) (平成6年6月8日より)
会長 高 坂 保 (駒ヶ根市教育長)
理事 川 端 清 司 (駒ヶ根市教育委員会生涯学習課長) (平成6年3月31日まで)
" 木 下 英 明 (駒ヶ根市教育委員会教育次長兼生涯学習課長) (平成6年4月1日より)
" 友 野 長 一 (駒ヶ根市文化財審議会会長)
" 松 村 義 也 (" 副会長)
" 竹 村 進 (" 委員)
" 林 越 (" ")
" 吉 江 修 深 (" ") (平成6年6月7日まで)
" 新 井 徳 博 (" ")
" 福 沢 正 浩 (駒ヶ根市立博物館長) (平成5年3月31日まで)
" 気 賀 澤 進 (") (平成5年4月1日より)
監事 宮 脇 昌 三 (駒ヶ根郷土研究会会長)
" 下 平 基 雄 (駒ヶ根市収入役)
幹事 市 村 重 実 (駒ヶ根市教育委員会課長補佐兼生涯学習係長)
" 中 村 敏 郎 (" 生涯学習係)
" 北 原 純 (" ") (平成6年3月31日まで)
" 唐 澤 裕 二 (" ") (平成6年4月1日より)
" 北 澤 武 志 (駒ヶ根市立博物館)
" 白 澤 由 美 (" 嘱託)

○上の原田遺跡・小坂治古墳群発掘調査団

- 団 長 友 野 良 一 (日本考古学協会会員)
発掘担当者 気 賀 澤 進 (日本考古学協会会員) (平成5年4月1日より)
調査主任 木 下 平 八 郎 (長野県考古学会会員)
調査員 小 町 谷 元 (上伊那考古学会会員)
" 田 中 清 文 (長野県考古学会会員)
" 北 澤 武 志 (長野県考古学会会員)

(順不同・敬称略)



第1図 上の原Ⅲ遺跡・小鍛冶古墳群位置図 (S=1:200,000)



第2図 上の原川遺跡・小鍛冶古墳群地形図及び周辺の遺跡 (S = 1 : 20,000)

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的位置 (第1・2図)

当遺跡のある駒ヶ根市は、長野県南部のほぼ中央に位置している。東には赤石山脈、中央構造線をはさんで戸倉山・高鳥谷山を初めとする前山の伊那山脈が並走し、西には木曾山脈があり、天竜川をはさんで南北に並走している。

伊那谷は、この高峻な両側からの過剰堆積により山麓に大小いくつもの扇状地が形成され、山麓から流れ出た中小の河川が天竜川に直交して注ぎ田切地形を造っていることは有名である。

当遺跡は、駒ヶ根市下平上の原地籍に所在し、JR小町屋駅の東方2.7km前後の天竜川の河岸段丘上に位置する。標高は610～620mを測る。南には小鍛冶沢(七免川)が、北には宮沢川が流れ、段丘下には小鍛冶集落があり天竜川へと続いている。

遺跡のある台地は、全体的には南東方向に緩やかな傾きをみせるが、ほぼ中央部にわずかな凹みがみられ、その突端部は雨沢と呼ばれ、かつてなぎ抜けをした所である。併行して行った分布調査(補助事業)でも上幅15～25mにわたり、黒色土が厚く堆積していることが確認されており自然流路の痕と考えられる。

西側にある上の原集落を東限として、この遺跡群一帯には人家は全く見られず桑園を中心とした畑作地帯となっている。段丘端から段丘崖にかけては、アカマツを主とした天然林が見られ、往古はこの一帯もアカマツで覆われていたものと思われる。
(気賀澤 進)

第2節 地形及び地質 (第2～11図)

1 地形の概要 (第3・4図)

上の原Ⅲ遺跡は、宮沢川・七面川および天竜川に囲まれた、標高610～620mの台地上にある。この面は緩やかに南東に傾斜しており、大田切川扇状地が侵食されて生じた段丘面と考えられる。この付近の地形は天竜川の氾濫原から上に4段の段丘面が数えられ、上の原Ⅲ遺跡・小鍛冶古墳群(以下上の原Ⅲ遺跡と略す。)の面は下から3段目になる。段丘面を下から小鍛冶Ⅰ面・小鍛冶Ⅱ面・上の原面・美女ヶ森面と呼んで区別することにした。

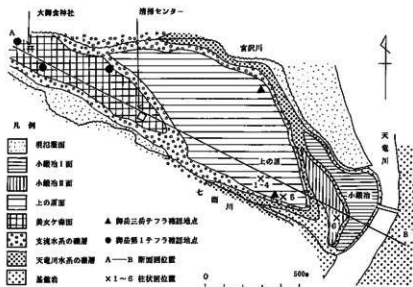
2 地形面区分 (第3～10図)

(1) 美女ヶ森面

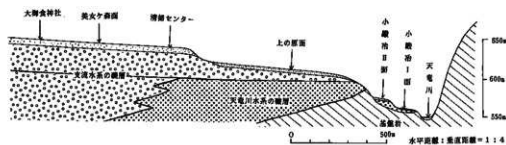
この地域では最も高位の面で、天竜川からの比高は90～100mである。大田切川扇状地の初期の面が侵食から免れて残された面であり、面には御岳第1テフラ：0n-Pm1から上のテフラが約6mの厚さで堆積している。このテフラ層は七面川を挟んで南側に分布する北の原でも観察され、その柱状図及びテフラの分析結果については「北ノ原Ⅲ遺跡」報告書(1993)に報告してあるので、ここでは省略する。第3図の●印は御岳第1テフラの観察された地点である。なお、段丘面区分の基準となるテフラの名称や年代は竹本ほか(1987)・町田ほか(1992)による。

(2) 上の原面

美女ヶ森面の東側及び北側には、一段低い上の原面が美女ヶ森面を取り巻くように分布している。この面は美女ヶ森面よりもおよそ20m低く、また天竜川からの比高は60～70mとなっている。上の原Ⅲ遺跡はこの面の南東部に位置する。



第3図 段丘面区分図



第4図 A-Bの地質断面図

この段丘面の堆積物は第5図(第3図×5地点の柱状図)に示すように、花崗岩・片麻岩やホルンフェルスなど四方の山地の岩石による礫層の上に約1mの砂質の堆積物が重なり、その上には御岳三岳テフラから上のテフラが堆積している。×5地点では上部の約60cmが道路敷設により欠損しているが、この部分については×1~4の柱状図(第6~9図)で観察することができる。いずれも上部から40cmの黒土、40~80cmの軟質火山灰、続いて硬質の火山灰の順に堆積している。これらの堆積物は鉱物組成からみて大部分は御岳火山の新期火山灰と考えられる。また御岳火山起源以外のものとして黒土の部分に褐色の色付きガラスを含むバブル型の火山ガラス、軟質火山灰の部分には地表面から約50cmの深さをピークにバブル型の火山ガラスが見られる。前者は鬼界アカホヤテフラ、後者は始良Tnテフラである。(第6~9図)

第3図の▲印は礫層の直上部に御岳三岳テフラが見られる地点である。

(3) 小籠治II面

上の原の東側に小籠治II面が小規模に分布する。この面は上の原よりおよそ40m低く天竜川との比高は20~30mである。面の堆積は第10図(第3図×6地点の柱状図)に示すように砂岩・チャート・粘板岩・花崗岩・黒雲母片麻岩・ホルンフェルスなどによって構成される天竜川本流水系の礫層の上に30cmの黒土と120cmの褐色砂層が堆積している。褐色砂層は御岳テフラのように見えるが、砂粒を観察すればほとんどがこの地域の基盤岩の風化岩片である。火山起源のものとしては砂層の下部に比較的多く見られるバブル型の火山ガラスと、全体的にごくわずかに含まれるしそ輝石である。火山ガラスは始良Tnテフラ、しそ輝石は高位の面に堆積した御岳新期火山灰



第5図 ×5地点の柱状図 (凡例は第6図と同じ)



凡例

(鉱物) bl: かんらん石, au: 黄鉄輝石, ky: L-輝石, ho: 角閃石, bl: 黒雲母
bl: 緑泥石, mg: 磁鉄鉱, qt: 石英, f1: 長石
() はごくわずかに含まれるもの
(火山ガラス) ho: パルメ状火山ガラス, mg: 放射状火山ガラス, br: 褐色ガラス
ガラスの付着層 ● 100以上, * 1-100, - 1以下
(柱状図) A: 凝石, * スコリア, - 砂-泥, ● 凝, * 内礫, ☉ 風土
白濁は火山灰

第6図 ×1地点(南西トレンチ)の柱状図



第7図 ×2地点(北西トレンチ)の柱状図

(凡例は第6図と同じ)



第8図 ×3地点(北東トレンチ)の柱状図

(凡例は第6図と同じ)

柱状図 No	特 徴	層位 No	主 な 成 物	傾斜		その他
				北	南	
50	褐色、御嶽新緑火山灰に風化 物及び黄砂層(HT)(K-Ah) 結成Tnテフラ(AT)、風 化岩片などが混じる	1507	f1>lp>mg>au>[註]>qt>ho >bl	*		kr
		1508	f1>lp>mg>au>[註]>qt>ho >bl	*		
		1509	f1>lp>mg>au>qt>[註]>bl >ho	*		
		1510	f1>lp>mg>au>qt>[註]>bl >ho	*		
		1511	f1>lp>mg>au>qt>[註]>bl >ho	*		
		1512	f1>lp>mg>au>qt>[註]>bl >ho	*		
100	褐色、ややハード 御嶽新緑火山灰に風化岩片な どが混じる	1513	f1>lp>mg>au>qt>ho>[註] >bl	*		
		1514	f1>lp>mg>au>qt>ho>[註] >bl	*		
		1515	f1>lp>mg>au>qt>ho>[註] >bl	*		
		1516	f1>mg>lp>au>qt>[註]>bl >ho	*		

第9図 ×4地点(南東トレンチ)の柱状図
(凡例は第6図と同じ)

柱状図 No	特 徴	層位 No	主 な 成 物	傾斜		その他
				北	南	
50	風土 0.3m+	1519	f1>bl>qt>mg>ky	*		風化岩片多
		1520	f1>bl>qt>mg>ky	*		風化岩片多
		1521	f1>bl>qt>mg>ky	*		風化岩片多
100	褐色砂 1.2m					
200	砂質、チャート、粘板岩、花崗岩、片麻岩、ホルンファルス、径5~10cm程度 陶磁器類 天竜川水濁水系の礫層 0.7m					
250	砂質、チャート、粘板岩、花崗岩、片麻岩、ホルンファルス、径15~20cm程度 陶磁器類 天竜川水濁水系の礫層 2m+					

第10図 ×6地点の柱状図(凡例は第6図と同じ)

が風や水によって運ばれ二次的に堆積したものである。

(4) 小鍛冶I面

小鍛冶II面の東側にわずかに低い小鍛冶I面が分布する。小鍛冶II面よりも5~10m低く、天竜川との比高は10~20mである。天竜川に面した段丘崖には黒雲丹片麻岩を主とする基盤岩が露出しており、小鍛冶I面を形成した段丘礫層はその上に薄く堆積しているに過ぎない。

(5) 氾濫面

小鍛冶I面の東側は天竜川に接しているが、北側には氾濫原が広がって水田となっている。

3 地形発達史

(1) 美女ヶ森面形成の時代

前述のように美女ヶ森面は初期の大田切川扇状地の扇端部に近い部分が侵食されずに残された面であり、こうした面は北に小城や飯坂の面、南には赤穂高校から北の原にかけての台地、上赤須東方の台地などがある。これらの面はいずれも10万年前に降下したとされる御岳第1テフラに覆われており、初期の扇状地面の形成された年代は10万年前より以前である。

赤穂地域に広く形成された初期の扇状地はやがて次の扇状地形形成期に入る。その結果山麓に近い部分では侵食や埋積が進み、東方の扇端部では侵食が進んで一段低い面を形成した。侵食は古田切川・田沢川・宮沢川・七面川・鼠川・上穂沢川など西方山地からの支流や、大田切川がこれらの流路を流れることによって行われた。このときに侵食を免れて残された面が美女ヶ森面などの面であり、それぞれの河川にはさまれて鳥の足のよう分布している。

(2) 上の原面の時代

美女ヶ森面を形成した初期の扇状地は河川の侵食の復活により下刻され一段低い上の原面を形成した。面をつ

くる礫層は花崗岩や片麻台など西方山地から供給された礫で構成されることから、この面は大田切川などの支流によって形成されたものと考えられる。この礫層の上には御岳三岳テフラの層が乗っている。御岳三岳テフラの年代が5.7万年とされていることから、この面の形成年代は約6万年前以前である。

(3) 小鍛冶Ⅱ面及び小鍛冶Ⅰ面の時代

上の原面を形成した河川はやがて更に下方へ侵食を進めることになる。これらの面の礫層は天竜川水系のものであることから、面の形成は美女ヶ森面や上の原面と異なり、天竜川水系によるものであることは明らかである。天竜川は扇状地の末端を侵食するのみでなく、基盤岩をも深く削り込んで形成した過去の氾濫原が小鍛冶Ⅱ面やⅠ面である。

小鍛冶Ⅱ面には御岳火山の風成テフラは認められないが、砂層の中に混じる蛤良Tnテフラのバブル型火山ガラスから、この面の形成年代を2～3万年前と想定する。

小鍛冶Ⅰ面は小鍛冶Ⅱ面が更に侵食されて生じた面であり、面の形成された年代は1～2万年前であろう。

(寺平 宏)

第3節 歴史的環境 (第2図)

駒ヶ根市の竜西地成(赤穂・下平地区)は天竜川に注ぐ中小河川の段丘上に数多くの遺跡が分布している。周辺の各遺跡の概要は一覧表のとおりである。以下歴史的な流れに沿って概観することとする。

縄文時代以前の遺跡は、今まで知られる所では今回発掘調査を行った上の原Ⅲ遺跡(第2図-1)のみである。

縄文時代早期の遺跡では、舟山遺跡(18)が昭和45・46年度に発掘されており、平安時代までの複合遺跡ではあるが、早期の土器・石器とともに37基の小竪穴群が確認されたことは有名である。

縄文時代前期では、末葉の遺跡が幾つか知られる。羽場下遺跡(19)は、昭和46年度の調査によって前期末葉の住居址が4軒検出されている。羽場下遺跡の東には小町谷遺跡(16)があり、開田時に諸磯期の土器が出土している。当該遺跡群の南岸北ノ原Ⅲ遺跡(30)からは、小鍛冶沼に面した北斜面より諸磯期の良好な資料が採集されている。丸山北遺跡(26)は昭和51年度に調査を行ったが、開田時の破壊により遺構・遺物の検出はできなかった。

縄文時代中期になると遺跡数も多くなり集落規模も大きくなり土器・石器とも多量に出土してくる。南原遺跡(28)は天竜川の第1段丘面に位置する遺跡で、昭和50年度に調査を行っている。中葉の住居址9軒が検出され土器とともに、石器の原石・剥片・石器が多量に出土し石器製作の集落と考えられている。

南原遺跡より一段上がった所にある丸山南遺跡(27)からは、中葉から後葉にかけての住居址が52軒確認され馬蹄形の集落形態となることが判っている。当期にはこの外にも上伊那を代表する大きな集落遺跡が知られている。大城林遺跡(20)からは29軒の住居址が、原邇外遺跡(12)からは住居址30軒と土壊330余基が検出されている。七免川遺跡(9)からも住居址10軒と土壊100余基が発見されている。これらの遺跡は共に調査以前の開田時の破壊が認められまた未調査部分を含めれば大規模な集落であったことは確かである。

縄文時代後期になると遺跡数は極端に少なくなり、住居址の検出はなく、七免川(9)・荒神沢遺跡(15)・舟山遺跡(18)・十二天遺跡(21)・北の原Ⅲ遺跡(30)から土器が発見されるのみである。これらの内、十二天遺跡(21)は上伊那の標識遺跡として知られている。

縄文時代晩期から弥生時代初期の遺跡としては、大城林遺跡(20)・舟山遺跡(18)・七免川遺跡(9)・如来寺遺跡(17)・荒神沢遺跡(15)がある。特に荒神沢遺跡は該期の標識ともなる遺跡で、住居址1軒、土壊262基、炉址1基・ロームマウンド4基が確認されている。

赤穂地区の弥生時代中～後期の遺跡は少ない。大城林遺跡(20)からは水神平式系統の単独埋設遺構とともに、

上の原Ⅲ遺跡・雨堀・小鍛冶古墳群周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	縄文時代	弥生時代	古墳時代	奈良・平安	中世・近世	備考
1	上の原Ⅲ	先土器?	○中				平成4・5年度発掘
2	小鍛冶古墳群	○後		○		○中世・近世	平成4・5年度発掘
3	雨堀					○中世	平成5年度発掘
4	小鍛冶		○後		○平安		
5	赤須城跡	○中	○後		○平安	○中世・近世	昭和54・62 平成3年度発掘
6	伴城平	○中				○中世・近世	昭和49年度発掘
7	御射山	○中		○	○平安	○中世	昭和50年度発掘
8	美女ヶ森	○中		○	○平安	○中世	
9	七免川	○中 後 晩	○前 中	○	○平安	○中世	昭和54年度発掘
10	原垣外北原	○中			○平安		
11	原垣外古墳群			○			消滅している。
12	原垣外	○		○	○奈良・平安		昭和52年度発掘
13	赤穂高校	○中			○平安		
14	尾崎	○中					
15	荒神沢	○中 後 晩	○中				昭和53年度発掘
16	小町谷	○前					
17	如来寺	○晩					
18	舟山	○早 前 後 晩	○前 後				昭和45・46年度発掘
19	羽場下	○前					昭和46年度発掘
20	大城林	○中	○中		○平安	○中世	昭和47年度発掘
21	十二天	○後					
22	放下					○中世	
23	光徳	○中			○平安		
24	中通り上	○中			○平安	○中世	
25	中通り下			○	○奈良・平安		昭和53年度発掘
26	丸山北	○前 中	○後				昭和51年度発掘
27	丸山南	○中					昭和51年度発掘
28	南原	○中					昭和50年度発掘
29	丸塚古墳			○			大正年間に破壊
30	北ノ原Ⅲ	○前 中 後					平成4年度発掘

中期初頭の壺形土器を併った木棺墓が確認されている。舟山遺跡(18)では後期の住居址3基が確認されている。

古墳は丸塚古墳(29)・原垣外古墳(11)・中通り下古墳(25)・小鍛冶古墳群(2)がある。丸塚古墳は1基、原垣外古墳は3基あったとされているが、ともに消滅し詳細は不明である。中通り下古墳(25)は全く伝承など存在を示すものはなかったが、昭和53年度の調査によって周溝が検出され古墳と確認されたものである。周溝内からは多くの土器が一括出土し、6世紀初頭を下らない時期のものと考えられる。また古墳時代後半の住居址13軒も発見されている。小鍛冶古墳群(2)については後述する。

奈良・平安時代の遺跡も多く知られている。中通り下遺跡(25)では、奈良時代の住居址11軒、平安時代の住居

址4軒が検出されている。また昭和30年代の道路工事中に灰輪双耳壺(市指定文化財)など出土しており、古墳時代から続く大集落が存在したものと考えられる。原郷外遺跡(12)では、奈良から平安時代の住居址12軒が、七免川遺跡(9)からは奈良から平安時代の住居址5軒と平安時代後半の住居址9軒が発見されている。さらに当該遺跡群の西側丘陵上の御射山遺跡(7)からは、一部の調査ではあるが、平安時代の住居址が9軒発見されている。御射山遺跡の西には美女ヶ森大御食神社があり、境内からは古墳時代・平安時代の遺物が出土し美女ヶ森遺跡(8)として知られている。当該神社には「日本武尊が東国蝦夷を征伐しての帰途、この里にしばらく滞在しその折豪族赤須彦が杉の大樹のもとに飯宮を設け酒をもてなした」という言い伝えが残っている。又神社西方600mには明治時代に当社に合祀された日本岐社があった。

この附近一帯は古墳とともに古墳時代から平安時代にかけての大規模な集落の存在があり、筆者はこの地から東の小蝦治古墳群のある上の原地籍から天竜川の西に出て、東伊那の栗林地区に抜ける「道すじ」を古東山道の跡と想定している。

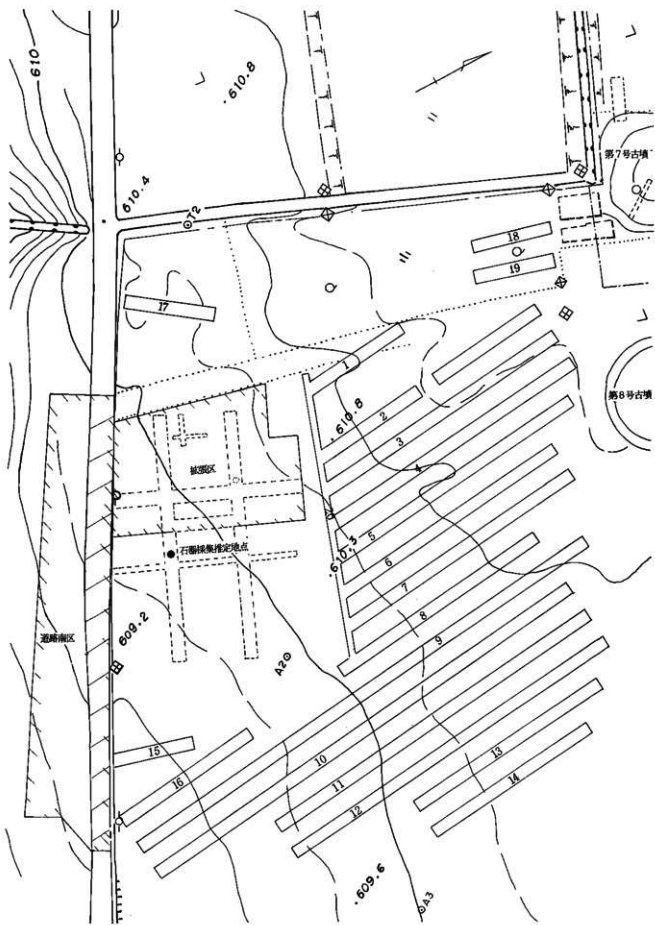
中世以降の遺物は各所で散見している。七免川遺跡(9)からは火葬墓が確認されている。当該遺跡群の北宮沢川の北岸には、市内有数の規模を持つ赤須城跡(5)やそれに伴う伴城平遺跡(6)がある。赤須城は河岸段丘突端部を利用した連郭式平山城で、東650m、南北500mの縄張りを持ち8本の堀がある。当該遺跡の東にも赤須城に関連すると言われる雨凧遺跡(3)があり一部に堀跡らしきものが見える。

(気賀澤 進)



第11図 上の原遺跡・小鍛冶古墳群発掘調査概要図 (S=1:2,000)





第12図 上の原遺跡発掘調査概要図 (S=1:600)

第三章 発掘調査

第1節 調査概要 (第11図)

今回の発掘調査対象区域内には、上の原Ⅲ遺跡・雨瀬遺跡・小鍛冶古墳群の3遺跡が存在している。遺物の採集が少なく遺跡の範囲については明確となっていない。今回調査を行うに当たっては第11図に示すように、台地の南西部かつて先上器時代末の尖頭器? 8点と頁岩質の縦長剥片1点が採集された地点を中心に、南北80m、東西100mの範囲を一応上の原Ⅲ遺跡とした。北限は第7号古墳の南にあたる。上の原Ⅲ遺跡の東、台地突端部を一段低い雨瀬遺跡の外縁として調査することにした。

小鍛冶古墳群は、大正年間の鳥居龍藏博士の調査の折にもこの台地一帯の広範囲にわたって古墳の存在が知られているため、台地の残る部分を小鍛冶古墳群の範囲として分布調査及び発掘調査を行った。

今回の調査は、上の原Ⅲ遺跡における先土器時代の遺跡の範囲の確認と消滅した古墳の確認調査に主体を置いて行ったもので、平成4年度は上の原Ⅲ遺跡の発掘調査、小鍛冶古墳群の北側一帯の試掘調査と7号古墳の周溝確認の一部調査を行った。すべて事業は市の単独事業である。

平成5年度の調査は、上の原Ⅲ遺跡の中心部と想定される区域と雨瀬遺跡さらに小鍛冶古墳群の南側部分の調査である。この内試掘調査に伴うものは文化庁の補助事業として行い、遺構の確認をもって市の単独事業の発掘調査に切り換える方法を選んだ。平成5年度に実施した補助事業文の報告について、平成6年3月に報告書にまとめてある。今回の対象となった遺跡は、上の原Ⅲ遺跡と小鍛冶古墳群である。

ここでは、大まかな各遺跡の範囲設定と調査区分に触れるにとどめ、詳細は各遺跡の項にて述べることとする。

(気賀澤 進)

第2節 上の原Ⅲ遺跡

1 調査方法と概要 (第12～14図)

上の原Ⅲ遺跡は、昭和41年度に故下村修氏らによって、黒曜石製の突頭器? 8点と頁岩質製の縦長剥片1点が採集されたことによって一躍脚光を浴びることとなった。これによって市内にも御子柴型石器の存在が知られたのである。この折の発見は氏の報文に詳しいが、いずれも桑園の掘り上げられた土の中からの出土であり、遺跡の正式な調査が望まれていたのである。出土地点は、その後の氏の不慮の死によって明らかではないが、かつて氏に何回か現地を案内してもらったことのある田中清文氏によると第12図-●とされている。

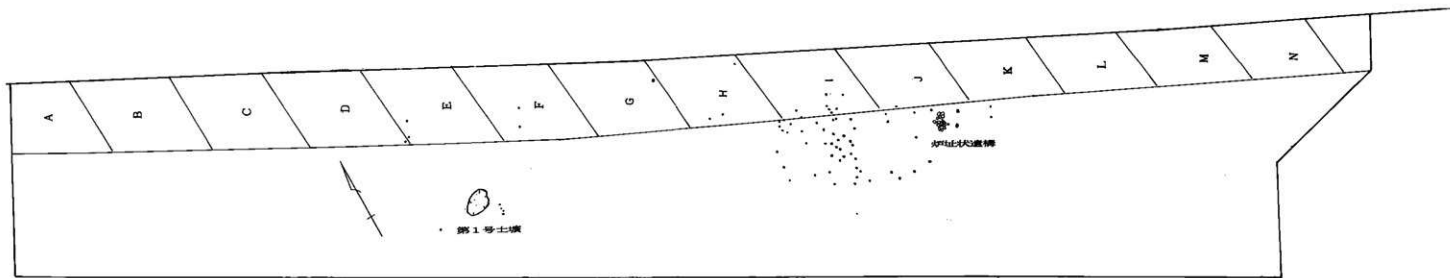
遺跡はわずかに南東に傾斜する台地の南央部で、市道小鍛冶線をへだてて南には小鍛冶沢(七免川)が東流し、東方段丘崖までの距離は推定出土地点から220m程である。

当遺跡を含む上の原地区に工場団地計画が持ち上がり、当遺跡について遺跡の範囲確認を行った上で極力主要部分を保存することとなった。

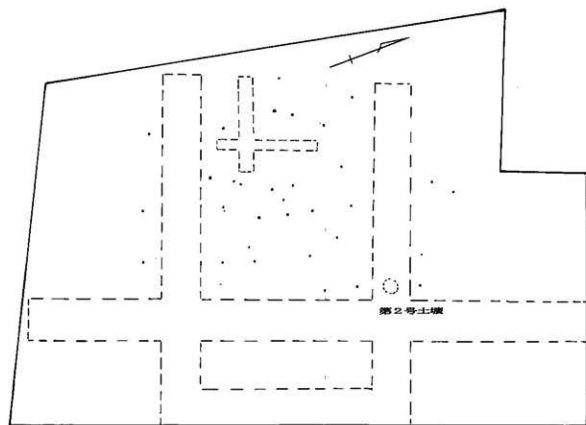
この協議結果を踏まえ、第12図に示すように遺跡の北側と東側部分、さらに西側に2m幅のトレンチを設定し試掘調査を平成4年度に行った。又遺跡の南の市道小鍛冶線が改修されるに伴い旧道路分と新設道路部分(道路南区)の調査も全面発掘を同年に行っている。

トレンチ試掘では第3トレンチを中心に土器の小片と折製石斧が、道路南区では焼土を伴う土塊1基と炉址状遺構1基、土器の細片と打製石斧を主とした石器が出土したのみで先土器時代の石器の発見はなかった。

平成5年度は前年度の調査結果に基づき泉文化課と協議の上、思いきって前年度調査で残された推定出土地点に



第13図 上の原Ⅲ遺跡道路南区遺構、遺物出土状況図 (S = 1 : 200)



第14図 上の原Ⅲ遺跡拡張区遺物出土状況図 (S = 1 : 200)

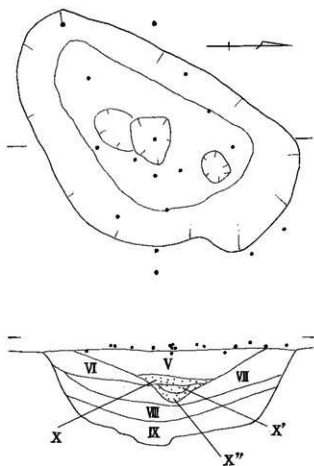


近い区域の試掘調査を行うこととし、文化庁補助事業によって実施した。その結果弥生時代北原期の土壌1基（第2号土壌）と縄文時代晩期から弥生時代の遺物の検出を見たのみで、ハードルーム面まで掘り下げても先土器時代の石器を確認することはできなかった。

この結果に基づき再度協議を行い、確認された第2号土壌や遺物がその周辺にまとまって出土していることから西側部分（拡張区）を市の単独事業として全面発掘を行うこととした。この調査によっても先土器時代の石器の確認はできなかった。他の遺物の検出もなく縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての土器片と石器が出土したのみである。掘り下げは遺跡の性格上全て手掘りで行っている。

尖頭器採集推定地点から道路までの間は緑地帯として残し、将来的には記念碑的なものを建てて保存することとした。

地質層序は、表土・耕作土（第1層）が20～30cmで漸移層（第II層）15～20cm前後を経て第三層の軟質火山灰に続いている。軟質火山灰は40～50cmの厚さで硬質火山灰となる。総体的な地形・地質については第二章第2節地形及び地質を参照されたい。（木下平八郎）



- | | |
|--------------------|----------------|
| V 黄褐色土(ロームブロック多し) | IX 黒褐色土 |
| VI 黄褐色土(ロームブロック少し) | X 焼土 木炭混入 |
| VII 褐色土 | X' 焼土 |
| VIII 暗褐色土 | X'' 焼土(ローム粒含む) |

第15図 上の原III遺跡第1号土壌実測図 (S=1:20)

2 遺構と遺物

(1) 第1号土壌 (第15・16図)

本遺構は道路南区の西側部に検出されたものである。軟質火山灰を掘り込み、プランは南東部がやや張った不整形円形を呈している。規模は160×100cmを測り、断面はU字形をなし、壁はゆるやかなカーブを描き底部からの立ち上がりは明瞭でない。

底には浅鉢状のビッドが3個みられる。

埋没土は自然堆積を示しほぼ中間部に40cmの円形状に厚さ15cmほどの焼土が逆円錐状に検出されている。焼土は埋没土を掘り込んだ状態であり2次利用と考えられる。内部からは石などは発見されていない。

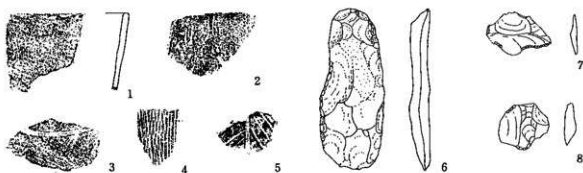
遺物の出土状況は第15図に示すとおりで、土壌上面からの出土で内部からの出土は認められなかった。土器の小破片と打製石斧、剥片とともに黒曜石製の剥片石器が出土している。

土器はすべて小破片で器形を知り得るものはない。第16図に示すように、無文ないハケ状工具による条線を持つものが多い。3は弧状に5は線状に竹管工具による沈線が描かれている。1・2は縄文時代晩期末3～5は弥生時代中期と思われる。

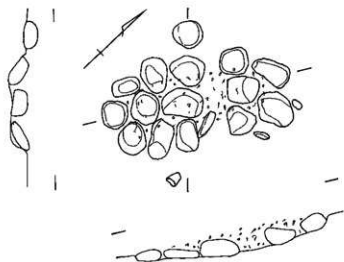
6は硬砂岩製の打製石斧、7・8はいずれも黒曜石製の剥片石器である。

土壌の時期は遺構に確実に伴う遺物がいないため不明である。

(木下平八郎)



第16図 上の原Ⅲ遺跡第1号土壌付近出土遺物（1～5は $\frac{1}{2}$ 、7・8は $\frac{1}{4}$ ）



第17図 上の原Ⅲ遺跡炉址状遺構実測図（S = 1 : 20）

(2) 炉址状遺構（第17図・図版1）

道路南区東側に発見されたものである。わずかに軟質火山灰層を掘り囲め、20cm前後の礫を楕円形に敷き並べている。大きさは100×70cmを測る。内部からは焼土がわずかに見られ炭化物が全体を覆うように検出された。

使用されている礫は花崗岩が主で片麻岩・砂岩も見られる。特に加工したような痕跡は見当たらない。焼成の痕は顕著ではない。

遺構内からの遺物の出土は見られなかったが、第13図に示すように遺構の西側からは土器・石器が出土している。

遺構に伴う遺物がないため時期は不明である。

（木下平八郎）

(3) 道路南区の出土遺物（第18図）

道路南区では第13図に示すように、遺物は炉址状遺構の西7×5mの範囲から多く出土している。土器はまとまった出土はなく全て小破片である。無文のものが多く、次いで条線の施されたものが見られる。

1は浅鉢形土器の口縁部で網網状浮線文を持つ。2・4は甕形土器の口縁部ないしそれに近いもので、2は口唇下に一条削り出しによる隆起線を横走、その下部には縦方向の条線が施される。4は幅広い沈線が横走する。

3は甕形土器の口縁部で竹管工具による条痕を横走させ、口唇上部には2条の連続押引文が施されている。

5・6・8・9・11・12は竹管工具による条線ないし条痕が施されるものである。7・10は大粒な長石を含み他のものと一見して違いがわかる。ともに貝殻条痕が横走する。ともに甕形土器と考えられる。

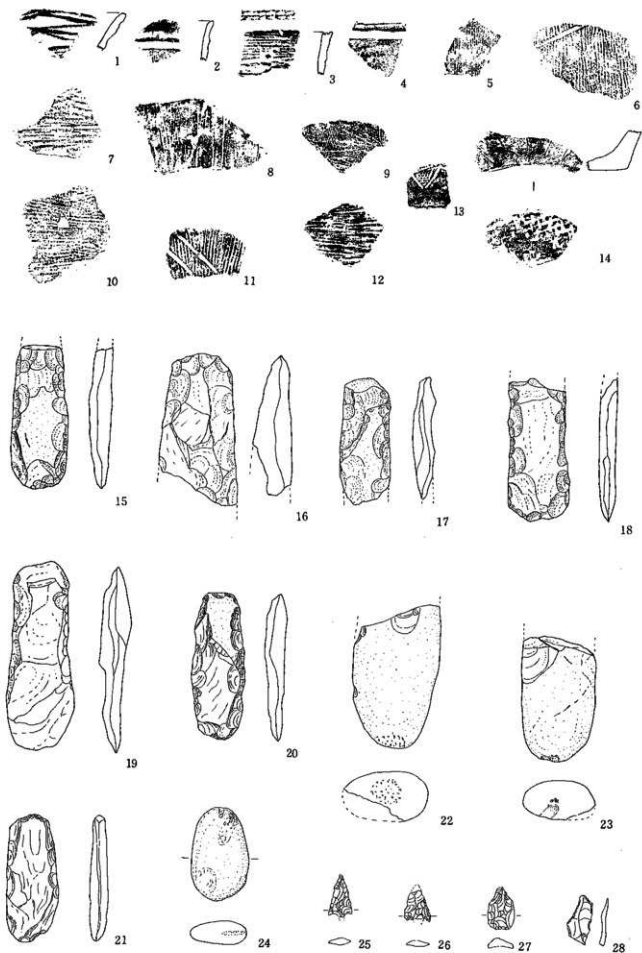
13は緻密な胎土で固く焼かれ区画文の中を縄文が充填している。14は甕形土器の底部で網代痕を持つ。

13は弥生時代中期前半、他は総じて縄文時代晩期末永式期に比定できる。7・10は該期の東海系土器である。

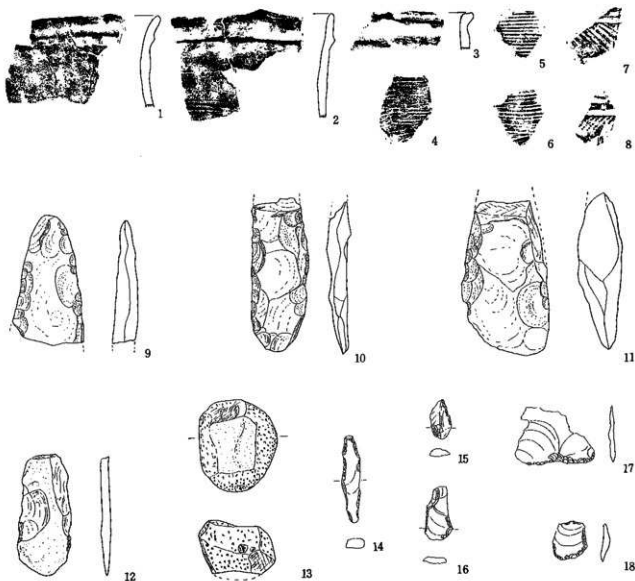
石器は打製石斧15～21と敲打器22～24、石鏃25～27、剥片石器28がある。図示できなかったものでは打製石斧の欠損品が6点ある。

石材は19は粘板岩、20・21は緑色岩類、25～28は黒曜石、他は硬砂岩である。

（木下平八郎）



第18図 上の原川遺跡道路南区出土遺物 (1~24は $\frac{1}{2}$ 、25~28は $\frac{1}{4}$)



第19図 上の原Ⅲ遺跡トレンチ出土遺物（1～13は寸、14～18は寸）

(4) トレンチ出土遺物（第19図）

平成4年度の試掘調査をしたトレンチより小破片の土器と石器が出土している。土器はほとんどが第3トレンチからの出土である。石器は10が第8トレンチ、11・12が第9トレンチの出土の外は第3トレンチのものである。

1～3はともに壺形土器の口縁部で、口唇下に削り出しによる隆起線文が一条横走している。口外帯を持つもの3と持たないもの1・2があり、2・3は小突起がみられる。2には横走る条線が胴部にみられる。

4～6は竹管工具による条痕文が横走るもので深鉢形土器と思われる。以上は縄文時代晩期永式期に比定でき得るであろう。

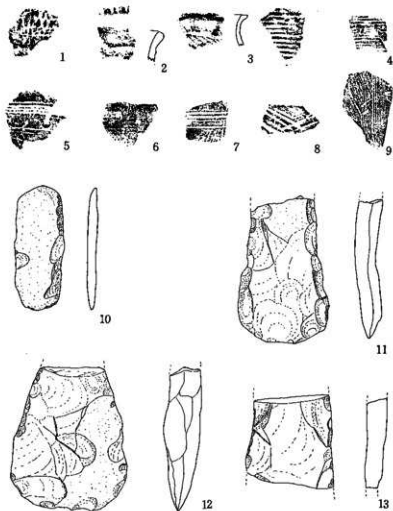
7・8は細片ではっきりしないが縄文時代中期後葉の深鉢形土器の破片と思われる。

石器はやはり打製石斧が卓越している。9～12の図示した外に6点の欠損品が出土している。13は敲打器である。

14～18は剥片石器である。

石材は9・11は硬砂岩、10は粘板岩、12・13は緑色岩類、14は赤色チャート、15～18は黒曜石である。

（木下平八郎）



第20図 上の原Ⅲ遺跡拡強区出土遺物(十)

(5) 拡強区出土物(第20図)

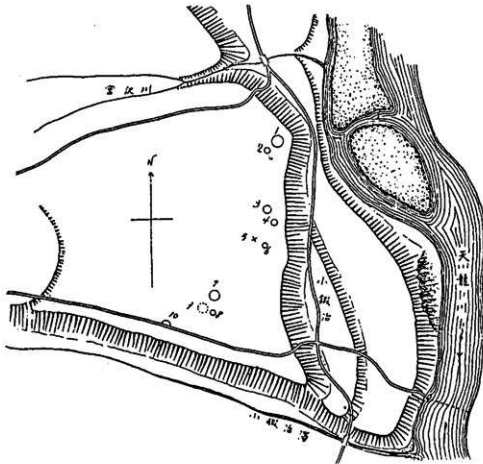
平成5年度の補助事業で検出された第2号土壇の西側一帯を全面発掘した結果、土器の小破片と4点の石器が出土している。

2・3は壺形土器の口縁部である。2には口唇上部に刻みが見られる。他は竹管工具による条線文、条痕文を持つものである。10は縄文時代晩期末他は弥生時代中期庄ノ畑期から北原期のもと考えられる。なお補助事業分においても該期の土器が出土している。

石器は打製石斧4点が出土している。石材は全て硬砂岩である。

(気賀澤 進)

第3節 小鍛冶古墳群



第21図 鳥居龍藏博士調査時の古墳位置図（先史及原史時代の上伊那より）

1 小鍛冶古墳群について（第21図）

小鍛冶古墳群の学術的な調査は、大正年間の鳥居龍藏博士の調査に始まる。その折に第21図に示すように9基（1～4、6～10）と遺物採集地点（5）1箇所が確認されている。その時点で9号古墳はすでに消滅し、10号古墳も半壊していることがわかる。この後の開墾によって、2号古墳と8号古墳は完全に消滅して全く今は面影を残していない。6号古墳も山中に大きな石を残すのみとなりわずかに原位置をとどめるのみで、さらに10号古墳はその後の道路拡幅によって完全に消滅している。

現在古墳としてほぼ原形をとどめているのは、1号・3号・4号・7号の4基を残すだけで、原位置のわかる6号・10号古墳を併せても6基が確認されるのみである。

昭和45年残る古墳の内3基を市の史跡として文化財の指定を行った。古墳の番号については、各々に現存する古墳に番号をつけて呼んでいたため、混同することが多く問題があるため今回番号を新たに振り直し、今後はこの番号で呼ぶことに統一した。

番号は1号（鳥居1号）・2号（鳥居4号）・3号（鳥居2号）・4号（鳥居3号）とし以下は鳥居博士の番号をそのまま使うこととした。以下新番号で記述して行くこととする。

（気賀洋 進）

2 調査方法と調査概要 (第12図)

今回の調査は先に延べた大正年間調査時以降原位置が不明の3号(鳥居2号)と8号の二つの古墳の位置を確認すること、区域内に現存する古墳の範囲の確認を行うことである。対象区域は広範囲にわたっており、鳥居博士の調査図をもとにその周辺を集中的に試掘溝を入れることとした。

平成4年度は台地の北側、1号古墳の南付近の試掘調査と第7号古墳の一部周濠の確認を市の単独事業で行った。その結果封土を削られた周濠を確認し、第3号古墳とした。平成5年度は、文化庁の補助事業によって試掘調査を行い、遺構の確認の後の本調査は市の単独事業で行うこととした。補助事業では、段丘崖に近い台地の縁辺にグリッドを入れ、さらに、台地中央部は任意のトレンチを設定して行った。また第7号古墳の残りの周濠確認調査も同時に行っている。補助事業分の調査内容は報告書(平成6年3月刊行)に詳しいが、関連上概要に触れておくこととする。第3号古墳の南西側から自然石を並べた石室状遺構が検出され、内部より土師器の高杯、須恵器の甕・平瓶など7世紀前半の良好な一括資料が出土している。周囲の調査を行ったが周濠は確認されなかった。鳥居博士の調査時に5地点として遺物採集地点が示されている所とほぼ同一ではないかと考えられる。その他、台地中央部の2箇所から時期不明の溝状遺構が検出されている。さらに第1号・2号古墳の現況測量も行っている。

市単独事業では、第4号古墳の一部に道路が通るため周濠の確認調査を行い、周濠内より火葬墓8基を確認している。また第7号古墳の東側から、補助事業によって一部周濠が確認されたため、表土を前面排土し周濠の確認を行い8号古墳とした。

(気賀澤 進)

3 第3号古墳 (第22～26図 図版2～5・10)

当古墳は、小殿治古墳群の中では、第1号古墳とともに、最も北側に位置している。第21図に見るとおり、この北側部分には2つの古墳が知られていたが、今は北側段丘崖に現存する第1号古墳が1基残っているのみである。

このため、古老たちから残るもう1基の古墳の位置を聞きとりし、第1号古墳の南西に幾つかのトレンチを設定したところ、周濠の一部が検出されたため、全面に拡張して調査を行った。

位置は第1号古墳の南西に当たり、中央部での距離は50m弱、周濠の間では約25mを測ることができる。第1号古墳の北東段丘下には宮沢川が流れている。

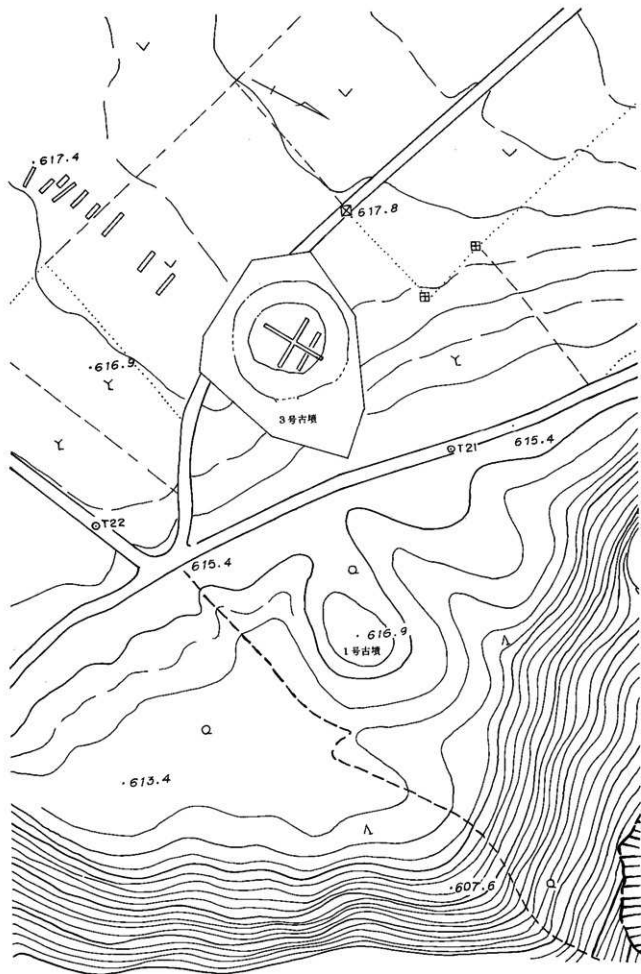
確認された本古墳を第3号古墳としたが、当古墳の南側には農道が通っている。現況は畑地で北北東にゆるやかに傾斜している。現況をみるかぎりでは、すっかり削られており墳丘の面影は全くとどめていない。

墳丘の封土は全く見られない。検出された周濠は東側に一部攪乱が及んでいるが、外径19×19.5m、内径12×12.3mの円形を呈しており、円墳である。

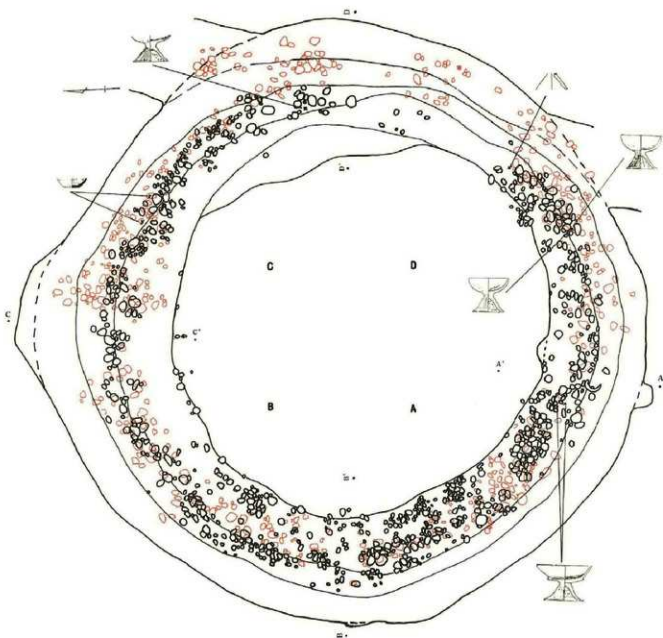
調査の都合上古墳をA～Dの4分画して調査を行った。周濠の断面形は底の中心をやや外にした舟底形を呈している。上幅は北側が最も広く4.5m、他は3～3.5mを測る。周濠の深さは墳丘部からの掘り形でも最も深い北側で90cm、他は70cm前後である。最深部は北東側にあり南側との比高差50cmを測る。

葦石は攪乱を受けた東側を除き周濠内から全面的に検出されている。覆土中に流入したように浮いた状態のものがほとんどであるが、一部基底部から墳丘に向かったものも見られ、周濠内にも葦石が貼られていたことも考えられる。当古墳群の内、補助事業で調査を行った第2号・7号古墳からは明確に周濠内側から墳丘に向かって葦石が貼ってある状態が検出されており、当古墳も同様であろう。

周濠内の覆土の堆積状況は第25図に示すとおり、自然埋没を示しており、人為的な埋没は考えられない。層は幾層かに分かれるが全体に固くしまった状態である。葦石は上部にも見られたが全体的に中央部から下部に集中し、墳丘部からの流れ込みの状態を示している。



第22図 小鍛冶古墳群第3号古墳発掘調査概要図 (S=砂)



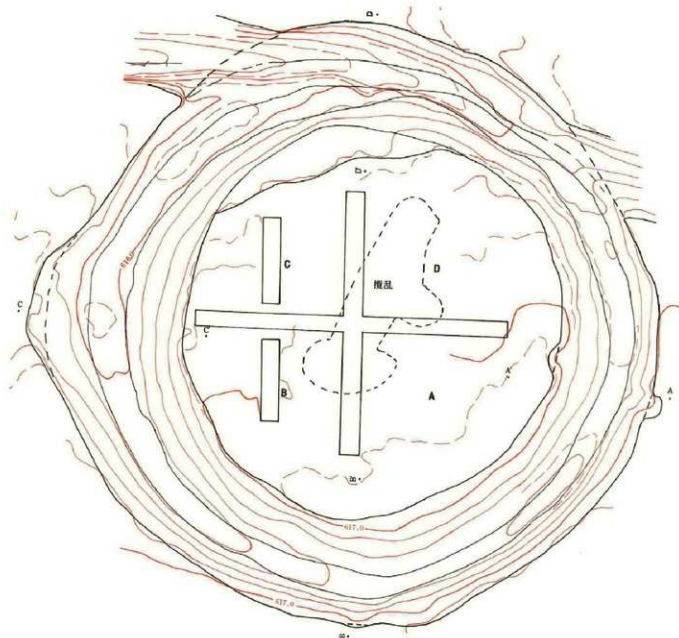
第23図 小沢治古墳群第3号古墳墓石状況図 (S=石部、赤線は上部の墓石を示す)

墳丘部は全て削られた上に、中央部は大きく攪乱されている。遺物の出土はみられず、主体部施設の痕跡は全く検出できなかった。

周溝内からの遺物の出土状況は第23図に示してある。周溝内に流れ込んだ墓石と一緒に出土しており、周溝内に埋設された感じはない。墳丘のものが墓石とともに流入したものと考えられる。

遺物は第26図に示すものですべて周溝内からのものである。土師器の高杯(1~5)5点と杯1点、須恵器の甕の底部1点のみで、鉄器の出土はない。

高杯はすべてはめ込み式である。1は杯部の体下部に段を持ったもので、ラップ状に開く脚部の裾はやや強く張っている。杯部の口縁部を2/5ほど脚部の裾部を1/4ほど欠いている。胎土は緻密で雲母を多く含み白紫色を呈している。焼成は良好である。杯部外面はヘラケズリの後横ないし斜のナデ、内面は下半部にはヘラミガキが上半

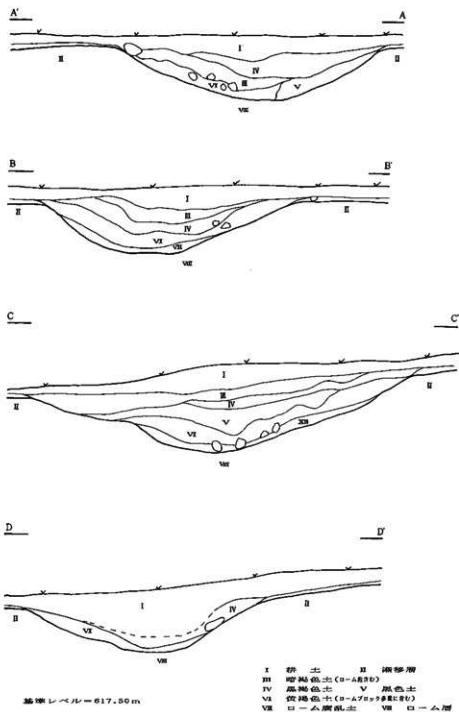


第24図 小塚古墳群第3号古墳実測図 (S=1/20)

部はヘラケズリの後横ナデが施される。脚部内面はヘラケズリの後縦ナデが、内面は大まかなヘラケズリによって整形され、裾部内面は横ナデの調整が行われている。

2～4は粘土・器形・整形・調整方法が類似している。胎土は1同様緻密で雲母を多く含んでいる。焼成は良好で、2・3は白赤色、4は黒赤色を呈している。ラッパ状に開く脚部は中央部にわずかなふくらみを持ち裾部はわずかに張る。杯部は丸く張り出した後中央部にて屈曲し、器厚を徐々に減じて口縁はほぼ直立する。杯部は内外面ともヘラケズリの後横ないし斜のナデ調整を行っている。脚部はくびれ部を粗いヘラケズリで整形の後ナデ付けし外面は、縦の丹念なヘラミガキが施されている。内面は大まかなヘラケズリで整形するのみで裾部は内面とも横ナデ調整がみられる。

5は高杯の脚部で裾部を欠いている。胎土は緻密で黒赤色に固く焼かれるが、雲母はわずかに含むのみである。調整は外面ヘラケズリの後に縦方向のナデが内面は他の高杯同様大まかなヘラケズリの整形が施されるのみである。



第25図 小巖冶古墳群第3号古墳周遶地層断面図 (S=1/50)

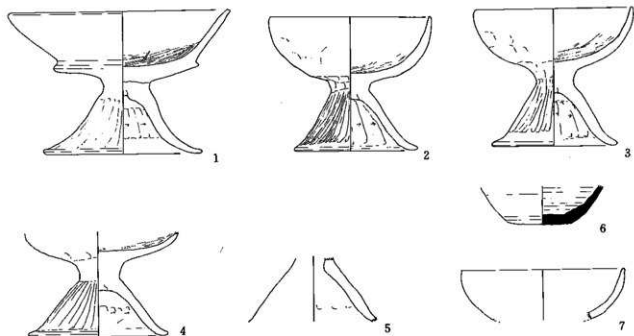
6は須恵器で甕の底部と思われる。

7は土師器の杯で多分高杯の杯部と考えられる。破片からの器形復元である。胎土は繊維で雲母を含み黒赤色に固く焼かれている。調整は内外とも横ナダが施されている。

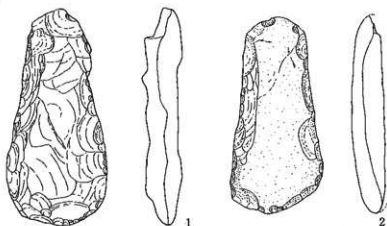
これらの時期であるが、出土状態からは一括資料と考えるには問題がある。2～4は脚部の形態から6世紀中頃、1はこれより古い様相を持っており5世紀末から6世紀前半に比定できるものと考えられる。

耕作土中より打製石斧が5点出土している。第27図に示した2点以外は欠損品である。1・2はともに攪形で、1は粘板岩、2は硬砂岩製である。

(木下 平八郎)



第26図 小鍛冶古墳群第3号古墳周濠内出土土器 (寸)



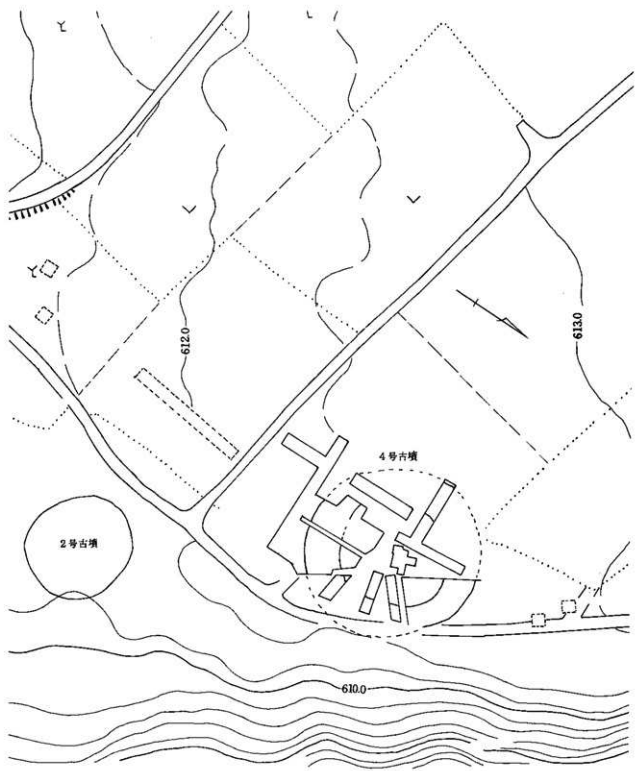
第27図 小鍛冶古墳群第3号古墳 古墳出土石器 (寸)

4 第4号古墳 (第28~32図 図版6.11.16)

概況及び現況 本古墳は台地中央縁辺部に位置し、東側はすぐ段丘崖となる。南西にはほぼ原形を保つ第2号古墳 (鳥居4号) があり、中心距離は50mほど周濠間で23.4mを測り、その距離関係は第1号と第3号古墳とはほぼ同じである。

東側は農道が走り、墳丘は開墾や土取りによって、大部分が破壊され第29図に示すように北東部一部を残すのみである。その残った墳丘部も4~5箇所の攪乱による凹みがみられる。残っている墳丘は比高差70~100cmで注意をしなければ古墳とは気付かない程である。

調査は東側の農道を古墳側へ広げるため、拡張部分については全面調査を、それ以外は緑地帯として残るために周濠の確認調査を行うこととした。南西部は墳丘だけでなく、産業廃棄物の焼却場として掘り返されて周濠の確認はできなかった。残った墳丘は松林となっている。

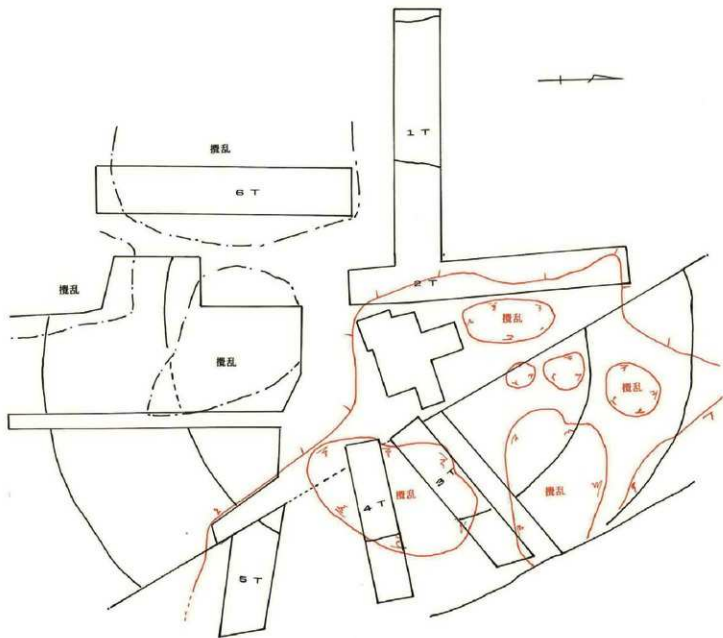


第28图 小冢冶古墳群第4号古墳発掘調査概要図 (S = 1/100)

遺構 周濠の南西部が攪乱のためはっきりしないが径18m前後の円墳である。周囲には上幅4.5～6.0mの周濠がめぐらされている。墳丘はすでに述べたように一部を残すのみであるが、70～100cmの比高差をみせている。墳丘の構築状況は、わずかに残された北東部、第2トレンチ（C-D）・A区（A-B）・第3トレンチの地層断面図（第31図）から判断する外ない。

いずれも墳丘の基盤はローム上面にある。周濠の外帯の状況からして、ローム面を深く削ることなく表土を削る程度で基盤として、封土はローム上に主として水平に積まれている。墳頂部に近い第2トレンチ（C-D）現表土を除けば4層にわかれておりいずれも固くしまっている。周濠の掘り形からやや緩やかな曲線を示して墳丘が構築されており、その曲線状況からすると原墳頂は現況より100cm高かったものと推測することができる。

墳丘部の葺石の状態はA区においてわずかに痕跡をとどめていた。第2号・第3号・第7号のように周濠内面から葺石を貼った状況は当古墳では確認できなかった。

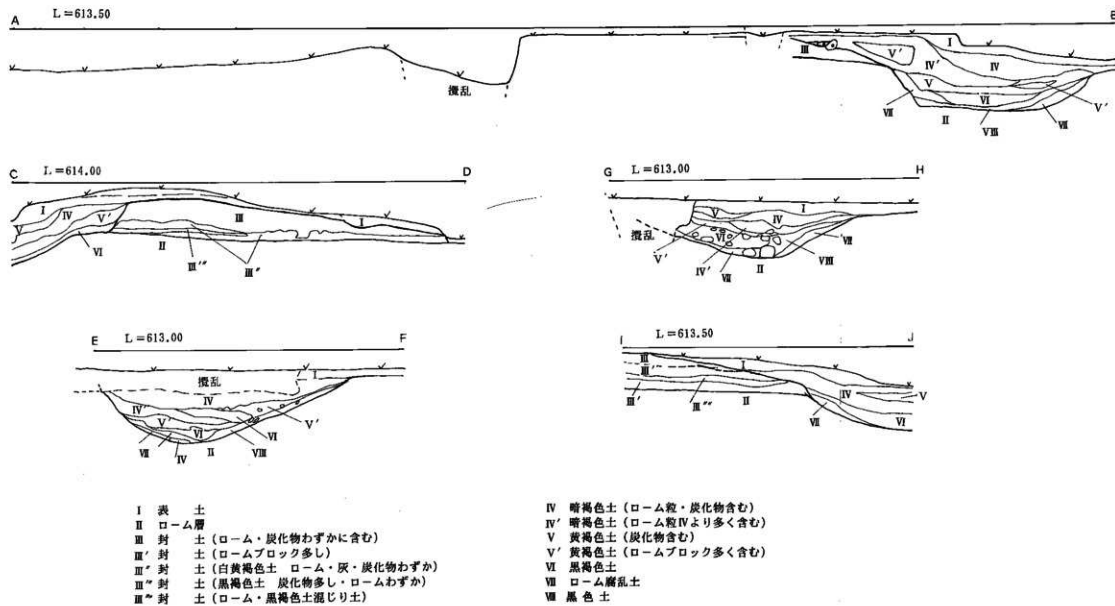


第29図 小殿治古墳群第4号古墳発掘調査図（S = 200、赤色部分は墳丘残存を示す）



第30図 小淵治古墳群第4号古墳実測図 (S=1/100、赤色は上部の葬石)





第3図 小鍛冶古墳群第4号古墳 地層断面図 (S=78a)



周濠の状況であるが、上幅も広くて深く古墳築造時には、墳丘をより一層きわ立たせる効果があったであろう。周濠の上幅が最も広い所は西側（第1トレンチ）で6.0m、南側で5.0～5.5mを測り、北側は全体にやや狭くなる傾向でA区西側では4.5m、北東部の第3トレンチの北側では3.5～3.8mである。掘り形は北側の一部を除けば舟底形で、墳丘部が緩やかなものとなっている。深さはやはり西側第1トレンチが最も深く墳丘面より1.7m、他は1.2～1.4mを測ることができる。周濠内部はおおよそ3層に分かれて固くしまった状態で自然堆積を示している。葦石が内部より大量に検出されている。内側は上面からもかなりの量検出されているが、総体的には下部に多くみられ、埋没状況は、明らかに墳丘面からの流入を示すもので、底に近い部分に多く見られことは、墳丘面の崩落が早い時点から始まったことをうかがわせている。

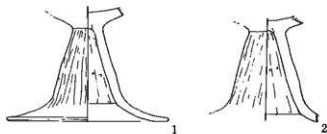
主体部埋葬施設の確認を行うため、残された墳丘部の内中心部に近い南西部に試掘溝を設定し調査を行ったが確認することはできなかった。削りとられた墳丘部分も基底部まで調査しているが同じく掘り込みなどは検出できていない。

原形をばとどめる第1号・2号・7号古墳（いずれも円墳）に横穴式石室の痕跡が全く見られないことから、この古墳も壙穴式の埋葬施設を持つものと考えられるが、すでに破壊されたものであろう。

なお、南側周濠内から墳丘部にかけて、プランははっきりしないが8基の火葬墓が確認されている。これらについては7 火葬墓の項にて詳述することとする。

遺物 遺物は少ない。墳丘部に掘り込まれた「いも穴」から高杯が出たと聞かされているが、所在は不明である。出土遺物は第32図に示す土師器の高杯2点である。A区周濠内から葦石と一緒に検出されたもので、杯体部を欠くものである。ともに胎土は緻密で赤褐色に焼かれている。差し込み式でラッパ状に開く脚は下部にて強く外反する。脚内面は大まかなヘラケズリによって整形され明確な稜を作出している。外面は丹念なヘラミガキ調整が施され、裾内外は横ナテ調整が行われている。時期は第8号古墳の高杯に類似しており、6世紀前半と考えられる。

（気賀澤 進）



第32図 小瀬古墳群第4号古墳周濠内出土土器（寸）

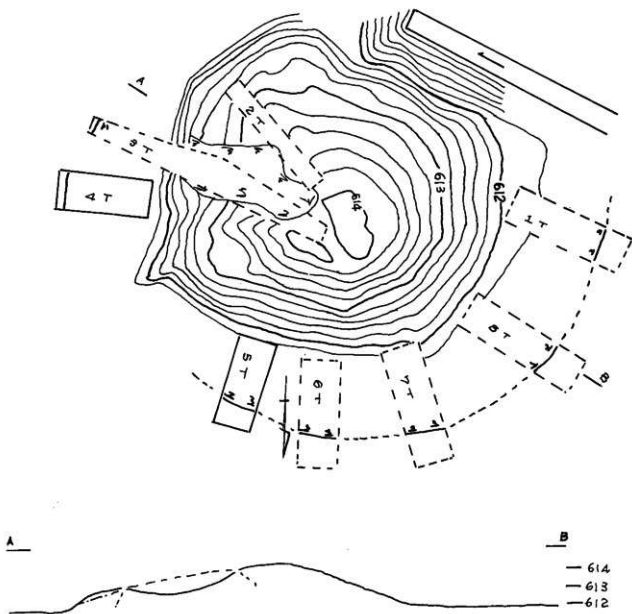
5 第7号古墳（第33・34図、図版7）

本古墳は第1号から第6号古墳と違い、台地の内側に構築されており、東側には周濠のみ確認された第8号古墳があり、その中心での距離は38m、周濠間で17mを測る。

当古墳は工業団地内に公園として保存されることとなっており、平成4年度では周濠の範囲確認のためのトレンチを東と北側の2箇所に設定して調査を行った。平成5年度ではトレンチを6本設定し、同様周濠の調査と主体部の位置確認調査を実施している。この調査結果については、平成6年3月刊行の報告書を参考とされたい。

古墳は円墳で、墳丘の大きさは径18m、周濠までで径27mを測る。墳頂の高さは現高2.4mである。墳丘の東側は大きな凹みがあり覆乱されている。また南東部はイノシシ小屋によって一部墳丘が壊されている。

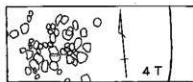
今回の調査は周濠の範囲の確認にとどめ周濠内部は掘っていない。周濠内には第34図に示すように葦石が流れ込んで



第33図 小巖治古墳群第7号古墳実測図 (S=200)

平成5年度の調査では、周濠は舟底形を呈し、上幅は4～5m、周濠の深さは45～55cmと浅いものである。なお、文化庁補助事業で主体部攪乱部を下部まで調査したところ、外見より広い範囲にわたって攪乱され、さらに中心部に向かって掘り込まれており、盗掘の可能性が高い。主体部はすでに掘り返されたのか確認はできなかった。遺物は本調査では全く出土しなかった。

(木下 平八郎)



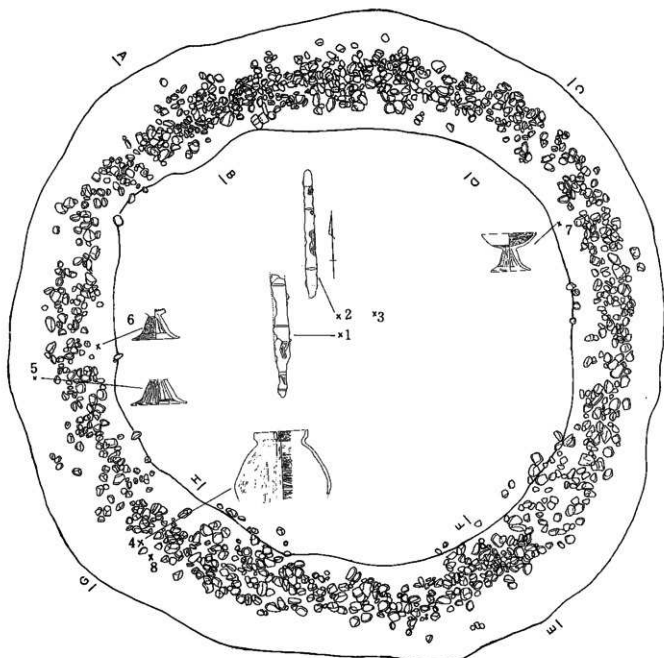
第34図 小巖治古墳群第7号古墳
トレンチ調査実測図 (S=100)

6 第8号古墳 (第35~39図 図版7~9、11~13)

本古墳はすでに墳丘が削られ周濠のみが確認されたものである。現況は畑でまったく古墳の形跡をとどめていない。位置は第7号古墳の東側にあり、その距離は中心で38m、周濠間で17mを測る。

補助事業の溝状遺構の確認中に墓石が流れ込んだ周濠の一部が確認されたため、急遽全面発掘を市の単独事業で行うこととした。さらに第7号・8号古墳の北側も墳丘の削られた古墳の有無のため、重機にて表土をぎを行ったが周濠など遺構は確認されなかった。表土から20~25cmで遺構検出面となる。

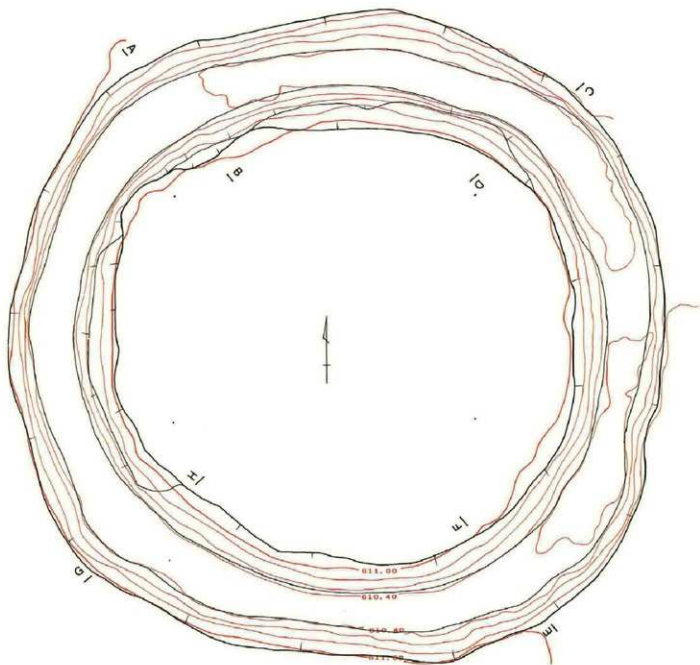
周濠の規模は、外径17m、内形11~12mである。周濠の上幅は2.5~3.0mを測り掘り形は舟底形を呈している。深さは掘り込み面から70~80cmと浅い方である。周濠内の堆積状況は第37図に示すとおりで、自然堆積を示してお



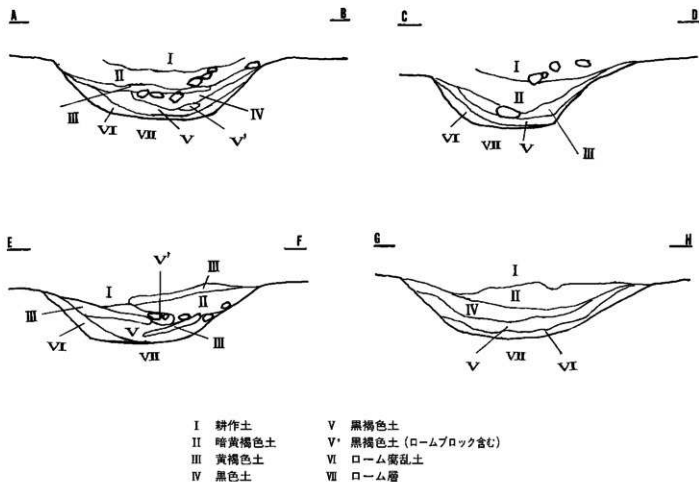
第35図 小鍛冶古墳群第8号古墳墓石状況図 (S=1/100)

り、固くしまっている。葺石は中位から上部にかけて集中しており墳丘から流れ込んだ状態を示している。

墳丘内部を精査したところ第35図に示すように中央部から刃（第35図-1）と剣（第35図-2）がほぼ南北方向に並んだ状態で基盤（ローム層）に置かれた状態で発見された。さらにその東側（第35図-3）から茎部だけの刃子・鎌がまとまって出土している。基盤を掘り込んだ痕跡は全く検出できなかった。出土位置がほぼ中心部であり原位置をとどめていると思われることから埋葬主体部がこの位置にあったものと考えられる。墳丘が削られ、耕作が基盤まで及んでおり主体部そのものの詳細な構造は残念ながら不明である。このことから考えられることは、古墳構築時に旧地表を削ってローム面を基盤としその上に墳丘を築いたものであるのではないかということである。第4号古墳も墳丘断面に旧地表面が検出できていないことはすでに報じてあるが、当古墳も同様の構築方法と考えら



第36図 小鍛冶古墳群第8号古墳実測図 (S=100)



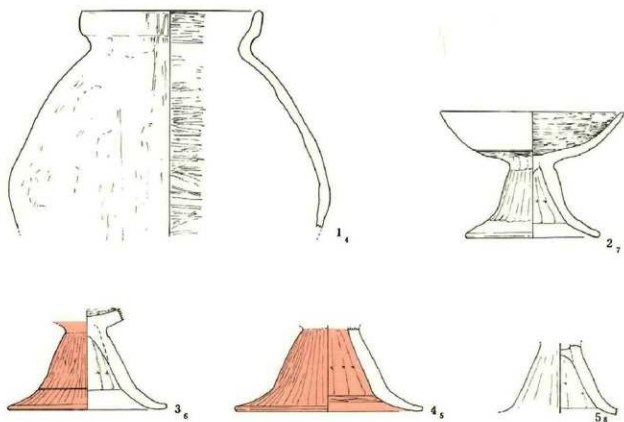
第37図 小鍛冶古墳群第8号古墳周濠地層断面図 (S=66)

れ堅穴式の埋葬施設の可能性がある。

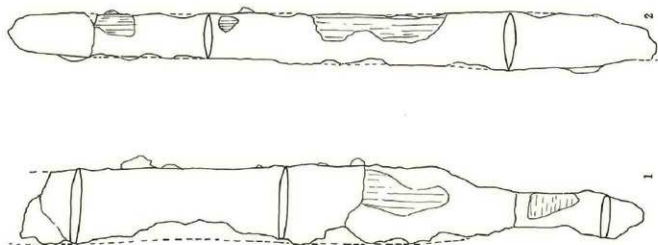
周濠内部からは墓石に混って、土師の壺(第35図-4)高杯(第35図-5~8)が出土している。周濠内に埋葬されたというより墳丘部からの流入と考えられる。

土器は全部で5点出土しているがすべて土師器で須恵器は出土していない。第38図-1は壺で底部も一部出土しているが複元まではいたっていない。胎土には長石・雲母を含み赤褐色に固く焼かれている。胴腹部に最大径を持ち25.5cmを測る。短い頸部から立ち上がって段を作って口縁はほぼ直立する。外面は丸味を持っている。器厚は一定していない。器内外面とも大まかなヘラケズリで整形された後、外面は縦ないし斜めのヘラミガキ調整が施されている。内面は横方向である。

第38図-2~5は土師器の高杯で器形を知り得るものは2だけである。すべてはめ込み式である。胎土には1同様大粒な長石がみられる。焼きはともに良好である。1は白赤色、4は白黄色を呈し、4は内外面、3は外面に朱彩がみられる。ラップ状に開く脚部は、器厚を徐々に減じながら強くはっている。内面には粗いヘラケズリ整形によって稜が作出され裾部は横ナデ調整がみられる。外面は縦方向のヘラミガキ調整、裾部はナデが施されている。3には一条浅い沈線がある。2の杯部はくびれ部から強く振り出し徐々に器厚を減じて口唇に至る。外面体下部には浅い沈線が一条めぐらされ、その下部はヘラミガキ、口縁にかけては横ナデ調整が見られる。内面は丹念な横方



第38図 小鍛冶古墳群第8号古墳出土土器 (1/3)



第39図 小鍛冶古墳群第8号古墳出土鉄器 (S=1/3)

向のヘラミガキによって調整されている。

時期は1がやや他より古いなごりを持つが6世紀前半に比定できるであろう。

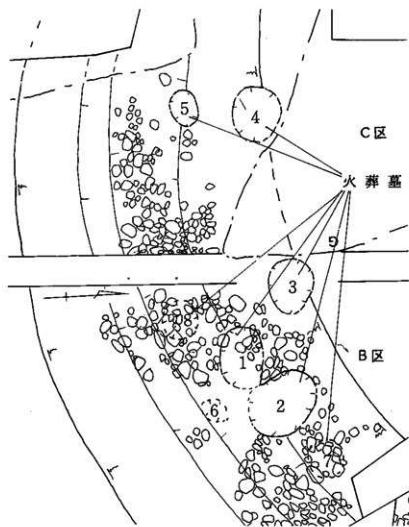
副葬品と考えられる刀(第39図-1)と剣(-2)刀子・鎌(図版15)が32点まとめて出土している。刀子・鎌は身の部分は一部でほとんどが茎である。これだけでは刃子か鎌かは判明しない。

剣は大ぶりなものであるが、身の切先にかけて半分ほど欠いている。直刀で平造りである。腐食がはげしく関部

の形態ははっきりしない。刃部幅は4cm、厚さは5mmである。茎には横方向の刀身部は縦方向の木目痕がみられる。

2の剣は茎の端部を欠くがほぼ完形である。身の長さは31.3cm、関部は弧状を呈している。断面はレンズ状で身幅は関部に近い所で3cm、鋒先2cmと先細りしている。身の厚さは関元で0.6cm・鋒先0.4cmと徐々に薄くなり、鋒先はへら状を呈している。身の一部に縦方向の木目痕がみられる。

(木下 平八郎)



第40図 小鍛冶古墳群火葬墓実測図 (S=46)



第41図 小鍛冶古墳群火葬墓出土古銭拓影(十)

火葬墓出土古銭一覧表

	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	計
開元通宝		1							1
太平通宝				1					1
咸平元宝		1							1
景祐元宝						1			1
熙寧元宝		1							1
元豊通宝						1			1
元祐通宝						1			1
政和通宝							1		1
洪武通宝		2							2
永楽通宝		1				1			2
宣徳通宝		1							1
寛永通宝			3		4			7	14
不明銭	3	3		2	2	5	2		17
計	3	10	3	3	6	9	3	7	44

7 火葬墓 (第40・41図 図版14~16)

第4号古墳の南側B・C区の周濠から墳丘にかけて8基の火葬墓が検出されている。B区に6基、C区に2基検出され、この附近一帯は攪乱が激しいので、すでに壊されたものもあると思われる。

火葬墓は周濠内の葦石を一部取り除いた状態でわずかに掘り凹めているもので、プラン等は明瞭でない。また骨粉まじりの炭化物を含んだ黒色土が散らばって見られ、この一帯がかなりの期間埋葬の場として利用されていたことが伺われる。

焼土は全く検出されず火葬は別の場所で行い、ここに埋葬のみ行ったものと考えられる。図版16・17にあるように周囲には自然石が見られるが、葦石なのか意識的に配置したものかは不明である。

火葬墓に伴う古銭の出土状況は一覧表に示してある。全体に火をうけて変形するものが多い。44枚出土した内、17枚は判読できなかった。判読できた27枚の内寛永通宝が14枚と最も多く、8号火葬墓からは寛永通宝6枚が重なって出土している。寛永通宝以外では、北宗銭(太平通宝・咸平元宝・景祐元宝・熙寧元宝・元豊通宝・元祐通宝・政和通宝各1枚)が7枚、明銭(洪武通宝・永楽通宝各2枚・宣徳通宝1枚)が5枚、開元通宝が1枚で、南宗銭は1枚も出土していない。

古銭一覧表から推測すると、中世と江戸の2時代に埋葬されたと考えることができる。 (木下 平八郎)

第IV章 ま と め

下平上の原の広い台地を2年にわたって調査を行った結果については、前述してきた通りである。以下、若干の問題点を指摘してまとめに替えたい。

故下村修氏によって先土器時代の遺物が採集された上の原Ⅲ遺跡は、2年にわたって御子柴型石器の確認を試みたが、該期の石器の検出はできなかった。これがまた御子柴型文化の有様を示しているともいえるのではないかと考えられる。

下村氏の遺物採集推定地点は工場用地内に緑地帯として保存をすることとした。

小鍛冶古墳群の調査の目的は、大正年間の鳥居籠蔵博士の調査の時に確認された9基の古墳の内、現在所在場所が不明の3基の古墳と遺物採集地点の一個所の確認を行うことであった。

調査の結果はすでに報告したように2基の古墳の周濠を確認し、さらに文化庁の補助事業によって遺物採集地点とおぼしきより石室状遺構を発見調査することができた。これらの結果不明の古墳は大正年間の調査時に消滅していたとされる9号古墳のみとなった。9号古墳は調査時の図面からすると第7号古墳の南側の水田にあったものと思われる。今回の調査区域外であり、今後の調査に待ちたい。

以上のことからすると、古墳は2基が一組となって存在していたことがわかる。台地縁辺部北側に第1号古墳と第3号古墳、縁辺部中央に第2号古墳と第4号古墳が、さらにその南側に第6号古墳と石室状遺構が、台地内側に第7号古墳と第8号古墳が、その南側に第9号古墳と第10号古墳である。

古墳の埋設施設は、今回の調査ではすでに破壊され確認できなかったが、遺る第1号・2号・7号古墳に横穴式石室の痕跡が見られないところから竪穴式のものとするのが妥当であろう。古墳の築造時期についてであるが、主体部はすでになく、出土土器はすべて周濠内からのものであり、断定はできないところである。しかしながら第3号古墳からは5世紀末と思われる高杯も出土しており、古墳築造の初源は該期までさかのぼって考えても良いと思われる。

盗掘や破壊によって、各古墳の時期を特定するまでには至らないが、今回の調査によってこの古墳群が2基を1組とした5群からなっていることが明確になったことは大きな成果であった。

(気賀澤 進)



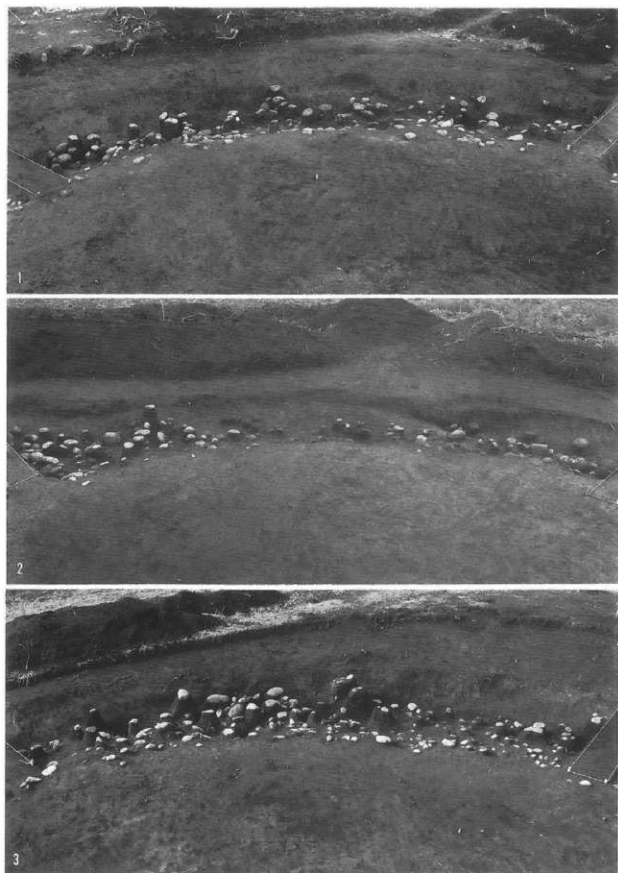
上の原田遺跡 1 炉址状遺構 2 炭化物残存状況 3 集石の状態



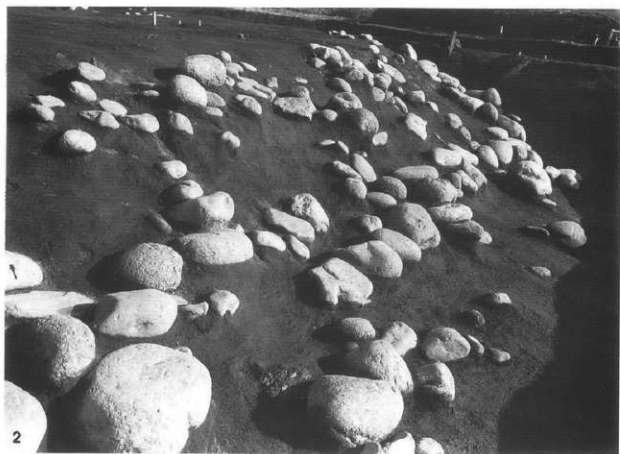
1 小霞冶古墳群 才3号古墳（航空写真）



1 小巖古墳群 才3号古墳(東より) 2 (北より)



1 小殿治古墳群 才3号古墳周濠(西北側)、2 同(北東側)、3 同(南西側)



1 小鍛冶古墳群 外3号古墳周濠斜面に於ける石残存状況(西側)、2 同(南側)



1 小露治古墳群 才3号古墳周滯内ふき石落下状況(南西側)、2 同(西側)、3 同(南側)



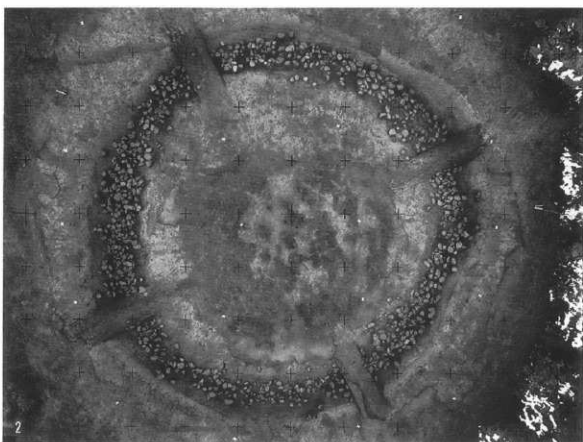
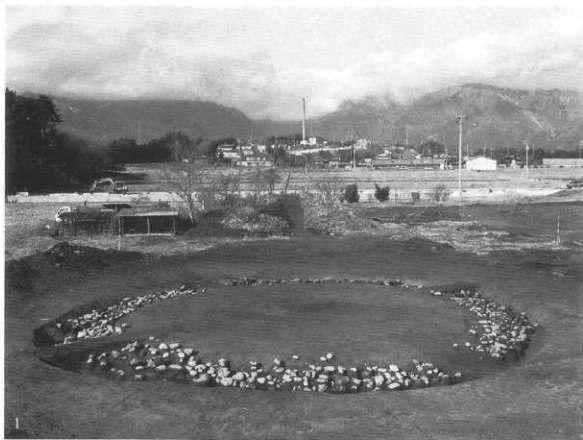
1 小殿冶古坟群 才3号古坟周室内高杯出土状况(No.5)、2 同(No.6)、3 同(No.4)、4 同(No.2)



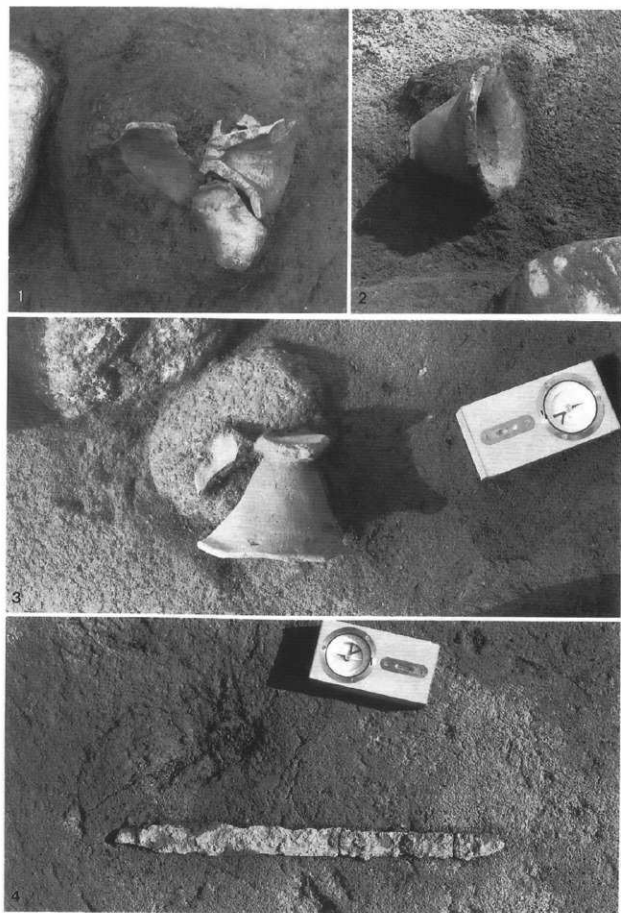
1 小殿治古墳群 才4号古墳周濠(南西側)、2 同(東側)



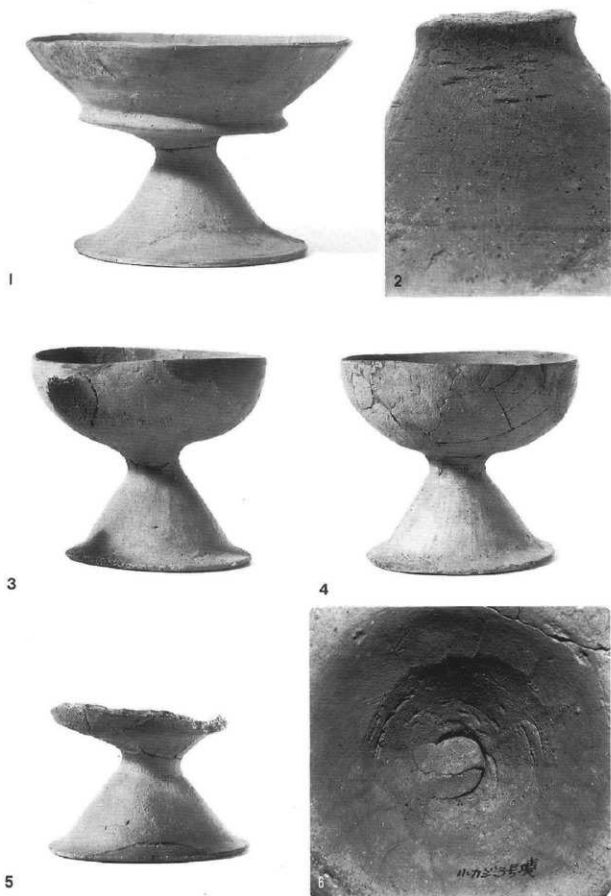
1 小鬲冶古墳群 冢7号古墳(下)、冢8号古墳(上)、(航空写真)



1 小鍛冶古墳群 才8号古墳(中央後方才7号古墳)、2 才8号古墳周縁内ふき石出土状況



1-3 小鬲冶古墳群 才8号古墳高杯出土状況、4 同 鉄刺出土状況



1 小淵治古墳群 赤3号古墳出土高杯、2 1の台脚部調整痕、3・4・5 赤3号古墳出土高杯
6 5の杯、台脚部の接合部（1：2）



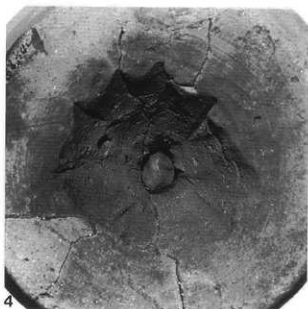
1



2



3



4

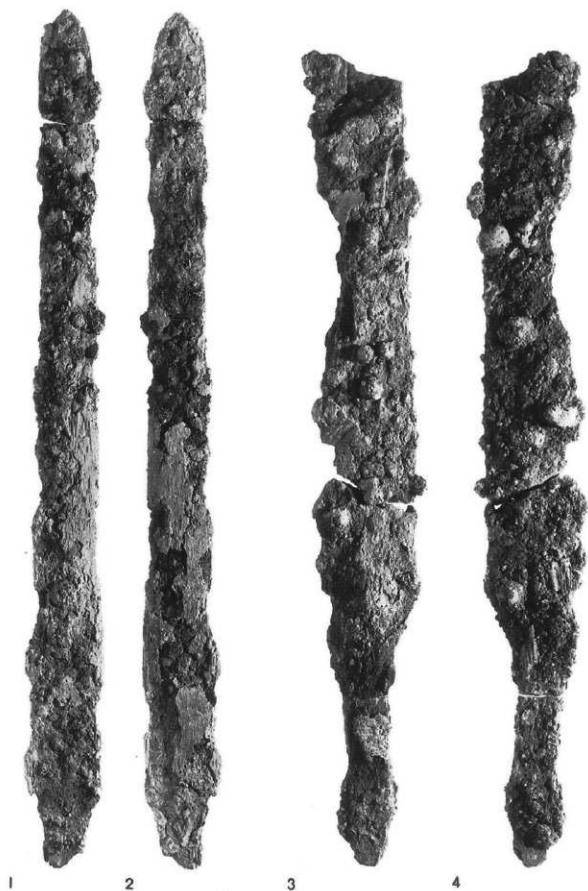


5



6

小鍛冶古墳群、1・2 才4号古墳周濠出土、3 才8号古墳周濠出土、4 3の接合部と台脚部の調整痕
5・6 伝才7号古墳出土鉄器（1：2）



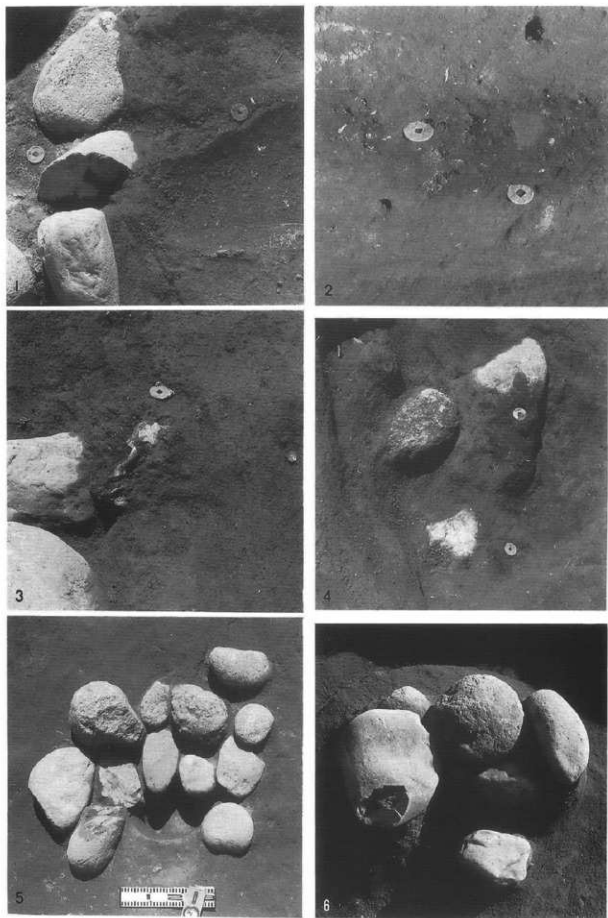
小冢冶古墳群、1・2 才8号古墳本体中央部出土鉄鈚 表・裏、3・4 同刃 表・裏 (1:1.5)



小塚古墳群 才8号古墳本体中央部出土、並 その他 鉄製品



小瀨泊古墳群 1 1号火葬墓、2 2号火葬墓、3 3号火葬墓、4 4号火葬墓



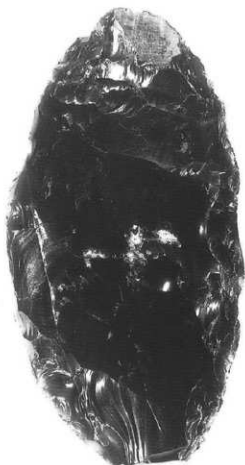
1-4 小巽治古墳群 才4号古墳南西側周遶上の火葬墓群、古銭出土状況、5・6 火葬墓上部石組



1 火葬墓出土古銭付着状況、2 火葬墓出土各種古銭(下側寛永通宝6枚1括出土)
3 小鍛冶古墳群 才4号古墳北東側周濠内高杯出土状況(1の右上をはなしたもの)



1



2



3



4

上の原田遺跡出土石器（故下村修氏採集品）（1：1）



1



2



3



4



1



2



3



4

上の原山遺跡出土石器（故下村修氏採集品）（1：1）



1



2



3



4



1



2



3



4

上の原山遺跡出土石器 1は故下村修氏採集品、3は下村春江さん採集品

上の原Ⅲ遺跡・小鍛冶古墳群

—平成4・5年度発掘調査—

平成6年10月31日 発行

編集 駒ヶ根市上穂栄町23番1号市立博物館内
小鍛冶古墳群等発掘調査団

発行 駒ヶ根市赤須町20番1号
駒ヶ根市教育委員会

印刷 駒ヶ根市赤穂4295
備 宮 沢 印 刷

